(6)

大正十年十二月號

◇菩薩行につきて……西田天香

◇或る日……倒挂子

◇對話(其の五)……松下吉衞

附◇栃木一燈園から……さよし

同人　懺悔報恩の奉仕者

祈願　不二の光明によれる生活

費用　供養されたる淨財

◇南都托鉢……青木義則

◇返照錄……遠近兄弟

◇彼等の群れ……吉田映二

一燈園◇宣光社

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は卽ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し、許されて活きん。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ、他に障りなき生涯を送らむことを期す。

諸宗の眞髓を禮拜して歸一の大願に參ぜん。

內外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成二就大圓覺一

別願　將二來世界眞平和一

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し、報恩の爲に行乞せん。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脫るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ、世諦を成ぜん。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に卽して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し以て在家俗諦を成就せんことを期す。

卽ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せん。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば則ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは箇中の消息、もとより言辭の彎張し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。

天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙ほ自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規によりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷、紛爭、葛藤を根絕し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては卽ち無相不二。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

菩薩行につきて

西田天香

出家したるものが家に還りたくなり、出家する事の出來ぬものが家の改革呼ばはりするは血で血をあらふ事になる、改革せねばならぬものは自身にもある事を忘れてはならぬ。眞に改革の必要をさけぶものは已れが改革せねばならぬその一分子であることによく眼をつけて、先づ已れの原因からして淸めるがよい。卽ちそれは全く脫却して見ることである。脫却して獨り少しく、その團體の力及信用を用ひず、新たなるものとなり赤裸にとなりて光によりて獨立することを證明してからさけぶがよい。此事を證明せずにする改革運動は血で血をあらふ事になる。

が、すまぬ。どうして持つていけばよいか。「光」は「光」なりでもつてゆきたい、「光」をけさずに持つてゆく方法はあるまいか、書いて「光」をけさぬやうにしたいものである、が、是は中々容易でないらしい。

いつも私は思ふ、世の中に聖書の數幾億冊、宏大な大藏經一字といへどもおろそかなものはない、若し徹して讀み破れば一句半句にても「光」に歸れるものであるを、徹せざれば讀破幾回能く其全體を暗んじても「光」には歸れはせぬ。要は徹する事である、「光」に歸ることである、と。書く事が「光」をともす事にはならぬ。書いたことでの一番尊いものでも、「光」へ行けと迄よりは言へぬ。書いたり言うたりする事は駄目であるとまでしか言へぬ。神、聖靈、佛、如來、などを立てねばならぬのは此爲めである、立てて純一無雜にそれにすがれといふのである。すがる其れは矢張不可稱不可思議の當體である。今の時に一番なければならぬものはやはり書きあらはせない「無」なのである。

第二に書けばすぐにうそになるのである。假令ば「斯くした」と書く、それは今してゐぬ事が澤山ある、「中々出來ぬ」と書く、併し不用意に每日してゐるのである。「ありのまゝ」をそのまゝ人の見るに任すは正直であるが、書いたらそれと反對な事が直ちにわかる。自分で知れる位であるもの、躓いて見るものには幾倍に見へるかも知れぬ。僞善と云はるる事位覺悟の前でも他を躓かすには堪へられぬ。かうなると一字も書きおろせぬ事になる。穴勝臆病なのでもない、是は正直な告白

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

である。

第三には私の「ガラ」にない。一字の字にも種々の意味が含まれてある、假名づかひ一つでも容易でない。あつめて何かを表現するのは、是は立派な一つの藝術である、私には全然それがない。

かうした理由がまた〳〵潜んでゐる、筆がとれぬは當然である。

併し又、かうした中から書かねばならぬ必要が同人の間に起る、書きあうて知りあはねばならぬ事がある。書いて見ると躓かずに讀んでくれる人もある。躓かずに讀んでくれる人は同じ「光」のかゞやいてゐる友である、さうして同じ友のあるを知つて互に喜ぶ人なのである、此人はよしや書きかたに種々の缺ける處があつても其眞相をあじはうてくれる。此場合に書くものが先達でもなく讀むものが後進でもない、本來「光」の同體である、知りあふ丈のものである、ちり〴〵になつた水銀の粒の大小が轉がり近づいて一つになるやうに、かうありたい、かうなるときに書く事は無意義でない。

どうか、かうした氣持で私しの分丈は讀んで下さい。おもしろい讀みものは他に求めて下さい。復雜な事を復雜な言葉で整理する事は私には全くふさはしくない、私はたゞ、過去にあつた事と、現在にある事と、未來に私にありたい事、あらしめねばならぬ事とを、獨り語りの樣に書くより外はないのである。

今私は福島市にゐる、道の因緣のある友達の家で、左の手で頭を抱へなから、萬年筆をはこばせてゐる。今しがた此家の主婦なる人と語り合うて「菩薩行とは實にむづかしいものですなあ」と結んだ處である、總身より絞り出した思ひで。あゝ此內容！私自身にはハツキリわかるが、その一片れをも如實にいひ現はす事は出來ぬ、併しそれを尤も正直に少し書いて見ようと思ふ。

「光明祈願」には通別兩願を成就する爲めに三種の身の扱ひ方が示されてある、さうして通じて「無相不二」と結んで、三通りの現はれは本態に於ては一つであつて、その一つも無相であるとしるされてある。今此大裂裟な世界的の根强い行き詰りを、はつきり整理＝＝整理しきれはせぬが、整理しきれる方法を明かにし一部々々より實現する＝＝するには、どうしてもこの三通りの方便がいる。宗教が地獄を極樂とし、穢土を淨土とし、地上を天國にするといふ目的ある以上、屹度三通りの方便を樣々の名に於て立てゝゐる。要は其時々の實地の問題に、それを應用するかせぬかによつて權威の有無が別れてくる。さうしていつの時代にもすぐに忘れてしまふのは、その內の一つの方便である處の「捨てる」といふことである。

ラツセルの言ひ分ではないが、人類は久しい宿業の爲めに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

すぐに所有慾といふ魔にとりつかれる、すると巧妙に大乘顏して「捨てるなんてのは小乘だ」などゝすましこみたくなる。かうした魔を退治せねばならぬ專問のものでも大抵は此魔王ににらまれてしまい勝である、極度に此魔王を退治しようとすれば此肉身の存在を許さぬことになるらしく思はせる。西洋文化の發展は明健なる個人思想＝どこまでも純ならんとする宗教的なるものも含まれてゐる＝に負ふ處が多い、又純なる個人思想がなくて人類に「光」を傳へることは出來ようもない。これほど尊いものではあるが、仔細に調べるとこのうちに巧みに「さはり」の種がまかれてある。「活きねばならぬ」といふ鐵案は、此肉身を「われ」と意識した人類のどうしても拔き難き牢關である。「活きる」ことを許されぬでない、自から要求もせずに産れて出るのであるもの けれども。「ねばらぬ」から危くなる。個人を純にしきつてしまへば、肉身そのまゝ靈化する。是れならば「捨て」きつた肉身が「光」によつて活かされる狀態と一つである。是を中心にしての文化ならば何ほど絢爛となつても葛藤はない。個々の左手と右手が如何に發達しても「われ」といふもので統一されてある以上、手と手が爭ふことはしない。神の名によつて大袈裟に戰はねばならぬやうな文明は、「ねばならぬ」から起つてくる脫線の結論である。許されて「活きる」と「ねばならぬ」との境目は人間の智識では判別出來ぬ。「哲學に哲學の悲しみあり」といふも、「禁斷の果實」のたとへも「もろこし我朝の智者達の申さるゝ觀念の念にもあらず」などゝ戒めらるゝも全くこれが爲めである。無相不二の「光」の威力によらざれば忽然念起して遂に靈肉一如の寶座を魔王に占領されてしまふのである。世界に水も洩さぬやうに益智識が發達してゆきながら、愈人類が火宅の苦しみを感ずるのは是が爲めではあるまいか。もしそうとすれば「光」の威力によつてこの魔王を退治せねばならぬ。そうして其「光」を實生活の上に迄現はさねばならぬ。個人性の聖化、靈肉一如の實を擧げねばならぬ。所有慾に纏縛してゐる現生涯にあてはめては、是が「捨てる」といふ形式になつてくるのは當然である。色々の名でかうなつてくるのを回避しようとするのは魔の働きである。「捨てる」形式（一寸斷つておく、捨てかたについては又囚はれてはならぬ、如何なる方式にて捨てるかといふ事は別に研究するとして玆には己れのものではないとし、又己れのものでないとしての新らしい生活法を一度は必らず取らねばならぬといふことだけにしておきたい）を恐れてはならぬ。「光明祈願」に「不二の光明によりて新生し許されて生きむ」とあるは、一度この「せまき門」より入ることを言ふのである。この境涯をその時の狀態で見るときは一寸世捨人の樣に見えるので、多くは消極的だといひ、逃げた弱さをあざけらうとする。けれども是は淺はかな見方であつて、このうちから徹底した建設の出てくることを夢にだも知り得ぬものである。「世を捨つる人がまことに捨つるかは、捨てぬものこそ捨つるな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

りけれ」とはよく道破した歌である。

それならどうして積極的に出てくるか、「許されてなら爲る」ことである、已れの私慾を根絶して信認されてからすることである。人は色々の理屈をこしらへて「人の爲め」とか「天下の爲め」とか「人類の爲め」とかいうて飛び出たがるが、正直に分析すれば大抵は自身の爲めである、其の純なるものでも已れの家庭の爲めである、更らに純なるものでも已れの國家の爲めである、これ以上の純なるものでも已れ等人類の生存慾の爲めである。自身の爲めは問題にならぬ。已れの家庭の爲めでは他の家庭と一つにならぬ、已れの國家の爲めでは國と國との戰ひとなるを免れぬ、已れ等人類だけの生存慾の爲めでも徹底した建設は出來るものでない、既に生存慾といふ、たとへ人類全體が平和に生存しても、愛（慈悲）が禽獸虫魚に及はいでは人類としての尊さが缺けてくるたとへそれはかまはぬとしても死なねばならぬといふ悲哀が殘る、眞の建設はもつと高い調子よりせねばならぬ。此決心と境涯は「許されて活きる」處に落付いて、もし無條件で託されるとき、この全體の爲め少しの名聞心をもさしはさまないで出て扱ふことである、これを「許されて爲る」といふのである。かやうに自分を容赦なくしらべる事は問題から逃げるのであつてはならぬ、已れの爲めに飛び出すものは強いこと云ふ弱虫であるが、問題から逃げるものは清淨がる弱虫である。どちらも「不二の光」でない。「光」によりて強いものはどこまでも已れの我執をしめあけて容赦はせぬが、許されて引受けるなら水火のうちへも飛び込める。そうしてチヤントどんな複雜なことでも整理することが出來ねばならぬ、少くともキリストの「三日にして建てかへる」といふ言葉を空想でない迄位の共鳴を以て、

私の畏友の一人が新生涯に立たれた時の前後の事であつた其友は一宗の教師として前途重望を負ふべき義務ある人であつた。然るに其宗の實權を握つてゐる先輩に〇〇先生があつて、此人は友なる教師の爲めには公私共に親代りの樣な間柄であつたために、硬軟剛柔恩威表裏を盡して苦戒された。其うちにかうした道理のつんだ話があつた、「獨り已れを路頭に置いて神樣に仕へる道、其純な尊さを知らぬでない、併し今かやうに尨大な教會あり傳道場あり學校ありして幾百萬の信徒が之れによつて道にすゝんでゐる、之を尊き統一＝神樣に御取次ぎする事がなぜ出來ぬのか、若し何か是等の組織に神樣の道にそれて行くものがあるとするならば、之れに代るべき方法を具さに持つてゐなければならぬと思ふがどうか、教へが廣がれば廣がるにつれて不純なことも出來てくるが、かくして之れを整理するといふ具體的の策なくしてたゞうるさくて逃げるならば我は其態度を肯ひかねるがどうか。」といふ樣なことであつた。當時私しもそれを傳へ聞いて、その先輩のさすがに責任を負うて一宗をひきゐる力量ありて、しかも後進

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

を思ひ、背ふべきは背ひ隨ふべきに隨べて餘さぬ親切な言葉だと思うたことである。然るに此問ひに對する友なる教師の答へは翌日一部の意見書となつて先輩の役室のテーブルの上に置かれたが、それが先輩を滿足せしむるものであつたか否かはその人ならでは分らぬが、「思ひ立つたものならまあ思ふ樣にするがよからう」と云ふ位な調子で辭職を許される事になつた。茲に言ひたいのは、その意見書には全般の問題に付て兎にも角にも根本改造の精神と形式との標準が明かに示されてあつた事を聞かせてもらうた私の滿足であつた。「三日にしで建てかへる」といふ抱負を、チャンとむねにたゝみ込んでゞなくては「捨てる」ことは「弱くて逃げる」ことになつてしまふのである。

こゝ迄いうてきたことをまとめていへば、「一度は是非捨てる」と云ふ形式より入り「光」によつて本來の建設底を明かにして置き、託されたら一切を背負うて水火の中をも辭せぬといふ樣な用意が必要であるといふ事になる。

このまゝで押通して無事に治まつてゆくものならば、思ひきつて捨てゝゆく樣な事の必要もないはずなれども、このまゝでは大衝突がくる、大破壞がくる。今現に縱と横に各種の鬪爭が行はれてゐる。唯物史觀とかよりすれば、セングリ倒してゆけばよい、新らしい方で古いものを、といふことになる。是は強い力で多數の力である、道理の全部ではあるまいが相當の分量が含まれてゐる。姑息なことでは之れを回避する事は出來ぬ。若し是に對抗して、悲慘な破壞がなく、其究極の理想の實現するとを祈るならば、それに堪へ得る道理の完きものでなくてはならぬ。そうしてそれを人と方法とに求むるならば、其人は愛に燃えてゐる人で、その方法は一切を捨てる事より起つ方法でなければならぬとおもはれる。

如上の大願がなくてはこの「捨てる」といふことも容易に出來ぬ。淨土教にも「易往而無人」とある、たまに其人があると樣々の惡評をおつかぶせて狂とし又畸としてしまふ、大きな人が出れば流罪にし又十字架にのせる、親も子も友人も一度は大低見捨てゝしまふ。法華經とかには、何でも「人に打ちのめさるゝ事によつて眞の道である事を知れ」とあるさうだ。「捨てる」のは此意味に於て「光」によりてする大建設の始めであるといふてもよい。我等同人は柄にゐつてもなくても此願にむちうつてまづ捨てようとする。是が一燈園生活の理想である。

茲に又もう一つ言ひ足したい事がある、「捨てゝ往く」とは遠方へ往くのではない、場合によつては「座を起たず」そのまゝでもある、又場合によつては許される處迄往く、往いてもそこに執着せぬ、朝に身を翻へして落付處に歸つたあとに了解して迎へらるればすぐにもとの處へ往く、此間もとより一定せずたゞ「光」のまゝに動く、「不二の妙諦」は不即不離である。からして「捨てた」刹那にはや何等かを許され託されてゐる事もある、「捨てる」稽古の最中にはや「預る」稽古

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

をさせられる事もある。願ひあざやかにして「光」に感應するときは、一歩も形にあらはれぬ先きに今迄よりも重任をおつかぶされようとする事もある。見樣によつて一代稽古である。いつからはつきり「捨てきれた」といひかねる以上、たとへ外見かなにりハツキリ「捨てた」形を取つたとしても、矢張修業中であつて、此修業中に「預つた」仕事は、預り得る資格があつてゞない爲めに矢張見學の爲めの「預り」である、故にいつも恐らくは終生懺悔の仕通しともなりはするが、此間に歴然として「捨てた」あとは「光」によつて「預らせてもらふ」といふ、截然たるケジメがどの樣な小さな事にまでも付いてゐるのである。

「捨てる」といふ一つの方便から「預る」といふ一つの方便へは斯く微妙な關係で亘り往くのである。捨てゝ「光」にまかせる生涯を假りに「一燈園」生活と名付けて「光」のまに〳〵人から許されて預る態度を「宜光社」態度というてゐるのである。(九年五月起)

或る日

倒桂子

見送りて、人足しげき夕暮の町に別れしが、
ふと胸を打つ異樣なる感動に
兩側(りやうがは)の家並は波のごとくゆらげり。
見かへれば
大都市の日は黄ばみて落ちぬ、
十字路頭に風うづまく。
たふとくもうら悲し、
埃にまみれ、肩を垂れてとくとくと
下座の行者の後ろつき。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

對話　その五

松下吉衛

Y。日本の論壇のあきつぽいにわ、今更じやないが、あきれてしまう。あんなにやかましかつたマルクスのマの字も此の頃わきゝやしない。マルクス全集の發行者なども手を燒いてるという話だ。

K。そんなかね！　田舍にひつこんでいるし、忙がしい此頃あんまり讀まないから、さつぱりわからないが。

Y。僕は、やつぱり、マルクスの言うことわ、ほんとうだと思う。例の「經濟史觀」にしても、彼の書きのこした豫言的記述までが、露國革命の實狀に徵すると、一々符合しているようだ。君等の立場でわ、どうとるのだね？

K。「經濟史觀」というのわ「唯物史觀」のことかね？

Y。そうだ。僕わ「唯物」というと「唯物論」が聯想されて誤解を招く恐れがあると思つて「經濟史觀」と言い習わしている。

K。社會組織變革の原理として社會科學の範圍でわ眞理として受取るべきだと思うが、戒相を持して淨財に食んでいる者のみわ、この支配外に立つていると信ずる。僕もマルクスの說いている所をそうよくわ知らないけれど、根本の點わ生產力が增せば、生產の方法關係組織は從つて變つてくるしそれにつれて又精神文化も必然に條件づけられる。そこで世の立替が行われる。云うてみれば社會というオルガンわ生產力というネジで締めあげられる度に變つたリズムで鳴り出すというのだろう。つまり問題わ生產力の增大ということに歸着するのだろう。ぢや、どうして生產力わ增大するようになるのかといえば、人に色・食二慾が本具されてある限り社會的に觀て事實として人口の增殖、慾望の複雜化とわ、否みようがない。この要求の刺戟によつて生產力わたえず增されて來ているというのだろう。だからこの色・食二慾を斷禁して「許されゝば生かして貰おう」と戒相を持して出ている行者にわ、經濟史觀の眞理も問題をなさないと言い斷れると思うが。

Y。なる程。でも、多くの聖、善知識の存在にかゝわらず產業改革、佛蘭西革命も起きたし、現にトルストイの母國にわ、劃明的な大革命が進行中だ。

K。それわどうすることも出來ないだらう。たゞ、血の流れ方わ、へつて居る筈と思う。

Y。でわ、君わ、社會運動を是認するかね?!

K。こゝについ此間青年團の人にたのまれて書いたものがある。讀んで見よう。

「……時勢をまともに注視せられよ。何が一番眼を射るか金力の輝きでわないか。金が人生を支配している消しよう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

のない事實でわないか。苦節幾年の志士も、處女の純な魂も金の前にわ無力となり商品化する。所有てる者の秩序的搾取！　金權による政治！　無産勞働者の荒廢しきつた生活！………

私心を去れば、誰とて此のわめき此の訴えに、耳をかさぬワケに行くまい。今わもう義人いでて、「目ある者わ見よ、耳ある者わ聽け」と叫ぶの秋でわないか。……

こゝに二條の白道ひかる。右なるを「懺悔奉仕の生活」と名づけ、左なるを「社會組織變革」と呼ぶ。「懺悔奉仕の生活」にわ入口に小門あり、裸體にして漸くくゞり得可く、何物をも携うるを許されない。道幅せまけれど坦々砥の如く、たゞ兩側の野原に咲き匂う花の香に心恍惚として歩みおくれ勝ちな怨がある。「社會組織變革」わ、道幅ひろけれど所々泥濘足を沒する程の難路あり、剰さへ片側奈落の深谷に、ぞめば、殊に團體行進の折など墮地獄の危險があるされば沒我決死の士のみよく目的地に達するを得べし。…………」

Y。そうか、それでわかつた。

栃木一燈園から

きよし

一燈園からとはをこがましくて言へないやうですが、久し振りで（光も七號になる事故）お自にかゝらせて頂き度く思ひます。こちらは相變らずの不緊張ですが此十月中に天香師一行を迎へ、又緣あつて足利遊歩のお伴をさせて頂きました。それから中桐先生が青年團の一夜講習の講師として十一月五日にお見えになつたことも喜びでした。

何もせぬ一燈園にも何かと因緣が結ばれて時々は尋ねて下さる方もあり、又いくらかは人にも問題にされつゝあるやうに思はれます。

桐生高工の吉岡さん、足利の中森さん、天理敎の扇田さん野村の石塚さん等には殊にいろ〳〵と敎へて頂きました。

松下兄は例のカイロ灰會社の經營や、町會議員としての活動に宜光社振りを發揮してゐるが、近く祈りの形をモット澄まして御詫びしなければすまないとギリ〳〵になつてゐる。富田は相變らず小學校の先生、「或は現じて敎師となり兒童を導きて人間となす」といつたやうな信條のもとにとにかく敎育方面に沒頭してゐる。そんなわけでハツキリした托鉢の形が今は出てゐないので少し淋しい。又尋ねる方をいくらかまごつかせはせぬかとも思ふが、そこは不二の行者の無相遊として暫らく許して頂きたい。足利の中森さんについて御紹介申し上げたいが、いづれ後の機會を待つことにいたします。

合掌。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

南都托鉢

青木義則

天香さん。

餘りにあざやかな光を拜みました其のよろこびを一刻も早く御聽きして戴き度くて此御手紙を差上ます。

夜道を三里、寒さうな月影をいたゞき乍ら、徒歩、只今丁度丹波市から歸つた許りで御座います。十二時に卅分程も過ぎました。これから夜をこめて、今日有りました事柄を、その有りの儘に書きつらねて御報告申上ます。

今日、朝、女學校の方で授業を致して居りました。廊下を黑い着物を着た方が二三人、お通りになりました。

近頃はストーブの取りつけの爲め每日人夫が入り込んで居ります。無論人夫が來たことと想つて居りました。授業が濟んで廊下に出ますと曲り角のところにまた、二三人眞黑な人が、織る樣に往き來する生徒達の間に立つて居ます。何の氣無しに通り過ぎ樣と致しますと、一人の方が丁寧に叩頭をなさいます。はつと思つて、よく見ますと福田さんで御座います。驚きとも、よろこびとも、其時の私の心は何とも名狀し難いもので御座いました。暫しはあつけにとられて居りました。もう、とつくに、來るなり職員便所に托鉢。事務員に怪まれて、「何處から來た」「何しに來た」「其のバケツは一體何處から持つて來た」と云ふ手きびしい洗禮も、もう立派にお濟ましになつたと申されます。其中に教官の一人に見つけられて、これ亦、いろ／＼と御調べを受けられた樣な始末。幸ひ其教官はすぐ、一燈園とは覺つて下さつたそうで御座います。御晝飯が濟むなり、殆どお休みにもならず、また生徒便所に托鉢。生徒は教師以上に一燈園を知つて居ります。勿論此頃では、聞かずとも、もう一燈園の方々とは覺つてしまつて居ります。

皆さんが例の鉢卷姿で箒を持ち、バケツを下げ、雜布をかけるのを見て勿體無い／＼の云ひ續け。そのうちに黑山の樣な生徒の間から、いつの間にか、何處からかバケツを下げて來、雜布を持つて參りました。あつちでも此方でも、一生懸命にお掃除を始めました。福田さんが「何うぞ私共だけにさせて戴き度う御座います」とか仰有いますと、一生徒は涙を一ぱい溜めて「勿體無いから」と答へたそうで御座います。福田さんも其他の方々も、生徒の涙に誘はれて、つい、胸が痛くなつたと云つて居られました。女學校の便所が濟みますと、今度は本校の生徒便所。下のコンクリートが磨いた樣に綺麗に拭はれました。授業中で御座いましたので、餘り生徒は參りませんでしたが、二三人何の氣無しにとび込んで來て、餘りの恐縮に小さくなつてしまつた樣な事も御座いました。ここ迄は、いかにもすら／＼と事が運んで參りました。一燈

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

園の托鉢としては、極々當前の過程を進んで來て居ります。私が申上度いと存じますのは、此後の光の現はれかたのあざやかさに就てで御座います。

相さんからの御通知によりまして、お越し下さるのは明日(否今日、もう、今日になつて居ります、只今、十日午前一時廿分)と許り思つて居りました。急のお越しでしたので、不取敢天理教の方へは長距離電話で御通知申上て置きました。ところが四時頃になり、さあ之から出掛け様と云ふ時になりまして天理教から電話が御座いました。「急に差支えが出來たので托鉢は暫く見合して貰ひ度い」

皆さんは、御出掛けの御仕度をして居られますし、折柄の時雨に、生徒達は態々雨傘を用意して持つて來て呉れて居りますし、私はもう途方に暮れてしまひまして、只うろ〳〵する許りで御座いました。されぱと云つてお斷り下さるものを強つてお願ひする筋のものでも御座いませんし、思ひあぐんだ揚句、生徒の家にでも、別れ別れに托鉢して戴く事にしたらと思ひまして、然う生徒に相談して見ました、中には今から直ぐ一緒に家へ來て欲しいなどと申す者も御座いました。然し、父兄の御意向も有る事で御座いますので、一應歸つて御意見を伺つて御許しが出たら電話で學校へ知らして戴き度いと申して歸しました。やがて、あつちからも、こつちからも電話が參ります。まるで、ひつ張り凧の樣で御座います。雇人が澤山居るので何も仕事は無いが、是非來て欲しいなど仰有つて下さる御家も御座いましたが、それでは、餘り申譯が無い樣思はれますので、心苦しくは存じましたが御斷りさせて戴きました。一番先に御申込み下さいました矢追さんと申すお宅、大きな病院で御座いますが、其のお宅へ二人だけ托鉢させていたゞく事に決めました。決めると又電話。今度は天理教からの電話。「兎に角、來て貰ひ度い」との御話ですやれ〳〵と、ほつと息をつきました。其間、皆さんは教官室で、教官達のいろ〳〵な質問に答へて居て下さいます。托鉢先に就きましては、主事迄が非常に心配して下さいまして、あちらこちら問合せて呉れたりいたしました。皆さんのお話を伺つて居りました教官の一人は皆さんの眞劍な態度に、すつかり打たれてしまひまして、「今晩の御飯は是非とも私に御供養させて戴き度い」と仰有つて下さいます。難有く頂戴する事に致しまして寄宿舍の一室でいたゞく事になりました。寄宿舍に參りますと、又托鉢。庭掃き、廊下拭き。生徒達は總出で、時ならぬ而も夜に入つてからの大掃除をはじめましだ。お掃除が濟みましてから、御飯をいたゞきました。生徒達は皆さんの御食事の最中にも、皆さんの中に割込んで參りまして、前にも後にも、右にも左にも、無邪氣な純な可愛い眼が私共の箸のあけ下し迄も、見つめて居ります。食事中いろ〳〵皆さんがなさる雜談(と申しましても、私共が、特に質問を出しまして、皆さんにお答していたゞいたものでは御座いますが)の一語一句も聽きもらすまいと、聽耳をそばだ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

てて居ります。誠に、和らぎと、よろこびに滿ちた集ひで御座いました。女學校の寄宿舍が創まりまして以來、こんなに澤山の敎官ならぬ男子の方が、おいでになりました事は恐らく初めてで御座います。舍監の希望、殊には生徒達の聲を揃へての切なる希望は「何うぞ今夜は此處に御泊り下さい」と云ふ事で御座いました。然し既に御約束も有りますし致しますので御暇する事に決めて、一同立ち上りました。生徒達はぞろ〳〵送つて參ります。校門の前に群つて、いつ迄もいつ迄も見送つて居ります。聲を揃へて「左樣なら」を告げます。少し行くとまた後で「左樣なら」道を曲らうとすると又、「左樣なら」。宗遠さんなどは、道々、「こんなに打たれた事は生れて初めてだ」と申していらつしやいました。「光の事は今迄は空に想像して居つた。光の力がこんなにはつきりと現はれて居るとは想はなかつた」とも申されました。天理敎の托鉢が行惱んだが爲に却つて矢追さんとの御緣が結ばれ、生徒達も皆さんも想ひも寄らなかつた悅びを得られたので御座います。

「行惱み」とは何人のそら言。行惱み、それ自身があざやかな光の現れで無くて何と致しませう。光が當然の途を通つて當然に現はれたとしか想はれません。光は何處にでも現はれて居るのでした。到る處に現はれて、到る處で、兩手をあけて私共を迎へて居て下さるのでした。それにも不拘、私共は自分で自分の眼を塞いで、光が見えぬ、光が見えぬとこぼして居るので御座いました。(大分冷えて參りました、只今午前二時十五分)

矢追さんへ托鉢させていたゞくお二人は、敎官の一人、生徒三人が御案内して參りました。私は福田さん、宗遠さん、帝大の方と御一緒に汽車で丹波市に向ひました。これも、天理敎の松村さんから來て居られる生徒が一人案内に立つて呉れました。

丹波市に下りますと、提灯を下げて二人、態々お出迎に來て下さいました。四時半頃から、着く汽車毎に出迎に來て下さつたのだそうです。御一緒に、夜の丹波市、夜の三島を通つて權大敎正松村吉太郎樣の御宅に着きましたのは八時近くにもなつて居りましたらうか。大玄關から通されて先づ恐縮してしまひました。客間に御案内を受けて二度恐縮。何と御斷り申上ても御許しが出ませんので、今日だけ光の御許しをいたゞく事に決めまして小さくなつて、晴がましい御座敷に通させて戴きました。絹の坐蒲團を進められました頃は、如何に光の御許しを得たつもりの强の者も、とう〳〵固くなりきつてしまひました。いろ〳〵御話を承つて居ります間に行惱の事情もはつきりして參りました。敎校の生徒方と同じ宿舍で同じ樣に起き臥しさせていたゞく樣御願して御座いましたのですが、それでは餘りだからと云ふので、何うやら模樣變になつたらしう御座います。何や彼やで話の行違ひから電話の事では有るし、ごた〳〵してしまつたらしう御座います。お斷り下さるどころでは無く、非常によろこんで迎へて下さ

いました。福田さんから、理屈ぬきに、托鉢の實際を有るが儘に申上ましたところ、一語一語に、非常な同感と贊意とを下さいました。天理敎のお考も詳しく御話下さいましたが、一燈園の精神とは殆ど不二と申しても差支無い位に想はれました。松村樣も亦一燈園の精神が餘りに天理敎の精神に近いのに寧ろ驚いて居られる樣で御座いました。托鉢と日の寄進との類似に就ても大分深く考へさせられて居られた樣で御座います。別して、理屈ぬきの托鉢には餘程感じて居られまして、「今度の托鉢によつて、敎校生徒達がどの位眼を醒まされるかも知れぬ」と仰有つてよろこんで下さいました。私も松村樣の御話を承りまして一燈園の精神がひし／＼と身に應へて參る樣覺えました。

一燈園の下座も天理敎の「どん底」も不二。

私は可なり久しい以前から天理敎の敎義は伺つて居りました。然しそれは多くは普通の信徒の方を通じて伺つて居つたので御座います。お話にはどうも腑に落ちぬ所が多く御座いました。從つて私は、敎義よりは寧ろ、其方々の眞劍な態度に惹着けられて居りました。云はゞ一燈園の鉢鉢生活に先づ惹着けられた樣なもので御座います。今、最も深く敎義を體得せられた方から直接伺ふ事が出來まして、信徒方の態度の其奥にひそむ或力に觸れ得た樣に想はれます。これが光なので御座いませう。やがて山海の珍味が並べられまして今更乍ら私共のうかつに恥入ました。厚く御禮を申し上て、汗をふき／＼御斷り致しました。

托鉢は何日間でも、何人でも差支ないそうで御座います。明日(今日の事)朝、諸所を廻つて見て、自分の氣に向いた仕事をやつて貰ひ度いなどと仰有つて下さいました。仕事はいくらでも有るそうで御座います。福田さんは、飽迄もお指圖を仰ぎ度いと申して居られました。私からも呉々も下座の精神をお汲みとり下さる樣御願致して置きました。私にも泊れと仰有つて下さいましたが、家の都合も御座いますので強ひてお暇致しました。又お二人、提灯を持つて御送り下さいました。月がよく澄んで居りました。近頃に無くよろこびに滿ちあふれまして汽車などに乘る氣は起りませんでした。御暇しましたのは九時半頃、寒い夜を、のんびりした心で歸つて參りました。寒さなどは忘れてしまひました。上着を脱ぎたい位に暖かくなつて參りました。此處にもよろこびと滿足とが私を迎へて居て吳れたので御座います。

私は先生に御縋り申した事情が事情で御座いますので、今日の日迄も私の一燈園生活に就きましては絕對に秘密に致して居りました。嘗て日曜日に托鉢中、お晝の休憩時間、用事が御座いまして竹田さんと丸善に參りました。書物を注文して居りますと、後から五六人、本校の生徒が入つて參りました。古川さんの仕事着を拜借して、草鞋はいた儘の私の姿を見て、餘りの事に開いた口も塞がらないと云つた樣な驚きを現はして居りました。其時も私は、何うぞ吹聽して下さるな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

などと申して居りました。然し、それや是やで、生徒達は色々想像はして居つた様で御座います。只私が、一言もそれらしい事を申しませんので、遠慮して、よう尋ねもしません様でした。昨日と云ふ昨日はすつかり分つてしまひました。もう構ひませぬ。却つてすつきり致しました。隠すと云ふ事は何事にもあれ苦しう御座います。生徒達は托鉢の實際を、よく拜見致しました。主事などもいつか、先生の御話を願ひ度いものだなどと申して居ります。私一個と致しましては御話などを御願ひいたします事は、一燈園の精神から申しましても何うも落着かない心が致します。然し學校で切に希望するのにすげ無くふり切るのも亦一燈園の精神から申しまして落つかぬ様想はれます。いつか改めて御願に出る様命ぜられる事が有りはせぬかと恐れて居ります。私としましては非常に耻かしう御座います。穴にも入り度い位で御座いますが、是も致し方が御座いません。

返照録

○宇佐美英兄(東京向島)　諸方への托鉢御苦勞でございます。世間へ引出される以上は毀譽褒貶も數多くなるは已むを得ざる事、無論覺悟の前のことでせう。

譽める方の側は世間一般ですから別に申上るに及びますまいが、私の手許へ來てゐるケナす方の側の二三を申上げて見ませう。老婆親切のつもりです。

○何だか臭いやうな氣がします。

○少しヤマコらしい所がある。

○君は「知らぬが佛」で善く見てゐるが隨分迷惑してゐる人がある。

○賣手が上手だから梁川も參つたんだらう。

○悪るい噂を本當とはせぬが、何となく一種の翳を感ずる。

○自然人とは云へぬ處が見える、厭味を感ずる。

○中桐氏とは利用し合つてゐるんだ。

○この頃の有様はどうしたことか、矢張時代といふものの力が大きいなと考へます。

○賀川の方が矢張現在の日本に必要な人だと思ふ。

○自家廣告我田引水が烈しい。

などです。また來たら御送しませう。私は近年の御様子を能くも存じませんが、金の方の問題では、誰が何と云つても、あなたが金を作つて榮燿する人ではなし、例へ人が迷惑してゐるとした處が我利の爲でないとはわかつてゐるつもりです。金の爲にあなたのやうな廻り遠いことをするとは考へられません。自家廣告といふとも擠がれるんだから仕方がない。その偶然の名聞を多少享樂してゐたつて僕は彼是云ふとはないと思ひます。全然至聖至純でないと可けないやうなとを求めるのは人間、人間味を知らぬものの言分でもあるし、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

宗教を人間以上と見る謬見です。僕はあなたの受くる名聞は遁げなくても拒まなくてもよろしい、進んで得ようとなさるんでさへなければ、勝手に響めさして置いて可い譯です。

以上の悪口は僕の文章が無厚意的だと思つて雷同的に云つてよこしたと認めらるるものは一つもありませんでした。却つて善く見てゐると解してゐる方が多數です。併し、どつちにしても、あなたを誤まつてゐることは爭へないか知れませぬ。あなたに取つてはつまらないことをしたとつくづく思ひます。悪るく思はないで下さい。飛上りの私、深い腹も何もない私、正直一方の私ですから。

私にしてもです。無聞でゐる内は顯揚したいし、餘り人氣ものになると、多少反感を持つやうになるのは矛盾した話です。ではどうすれば可いかと云はれると私も困ります。一切があなたには馬鹿々々しいでしよう。どうか世間にも私等風情にも、迷はされないで下さい。行く處へ行つて下さい。ゆるゆるとました身に泌むやうな御話の一夕を得たいと思ひます。

私はゴタゴタしたことをいくら聽いても仕舞にはあなたの「信仰」に眼を向き換へて矢

させるやうにヤリ通して下さい。（天香氏宛）

●西田透石兄（岡山縣大谷）　尊き父上様　一昨日は「懺悔の生活」御惠み下されまして誠に有難う存じました。早速御返事書くのが本意なれど、何分會社の方昨今千ウドンの製造に忙しく、毎日の製造だけにても注文追着かず誠にへとへとに疲れ唯安息の二字に歸る有様、延引の罪お赦し下さいまし。

早速高橋先生の許に屆け、惠みある有意義な本書の出版を祝されました、私も心からお祝ひ申上げます。內容は未だ詳かに讀ませて頂きませぬが、何物かの絶對の犯せない力が其の中から見出されます。必らず此の書が世に出て各方面の人達の良い而も強い刺戟と成り發奮の動機と成り、人心の戸を叩く六萬行願の成就の基礎を益々堅くするものと信じます。私の身と心は小踊りし、力附けられ、愈々おひかりの許に、私達は生かせて頂ける事實を泌々感謝させてもらひました。特に此の頃は前にも申しました通り、今年は製品の價も良いので、可也に好成績で、倉庫には昨年の素麵は一つも無く、注文だけの品が先方に渡せず困つて居る次第、毎日製造に追ひ使はれ、流汗瀧の如しとは、泌々實感して居りま

る程に苦しく思ひます。しかし私は此の尊き勞働の感激から離れることは赦されませぬ。いかに綿の如く、へとへとに疲れて居ても偉大な生活力と、勞働から受ける魂の惠みを捨てる譯には行きませぬ。疲れてる魂は、安らかな息ひを願います。夜が私の一番の安住の場所です。偉大な生活力を、私達の眞劔な活動のうちから見出して、私は餘りの強い感激の爲め嬉し泣きに泣きました。おゝ生活力！私は死物狂ひに成つて、生きることが幸福だと思ひました。そうして、私のいのりが微かでも何物かの絶對の支配力の許に救はれることを泌々味感させてもらつて居ます。有難し。有難し。何の境遇に居つても忙しい軀が一番幸せだと思ひました。

內部の現實との鬪爭は絶へず續けられて居ます。何物も赦し受け入れる立場に安住させてもらひながら、矢張、私は現實との不調和の爲め悶へるのは止みませぬ。それは自然です。餘りに近代人の內部の自覺が鈍いのに反して、私達の病的にまでに鋭く、自己を鞭打つ涙の多量なるを感謝しなければならぬと思ひます。思想は轉々と流れて行きます。外的の行爲は種々樣々な形で表現されます。私も

し私のうちなる魂の萌顯して止まぬポイントは、毫も傷けられること無く、脅かされる事なく、益々明かに魂の底に喰ひ入つて來る様な氣がします。お丶靈的の惠み、私でさへ感激して泣いて居ます。

すべては、おひかりの支配下にあるのです。どうぞお鞭打ち下さいまし。昨日のお手紙では本書拾册お送附下さつた由、承知仕りました。書物着次第高橋先生達と御相談の上、出來るだけ意義ある方法で賣り度いと思ひますあの葉書は見せます。呉れ呉れも力强き精神の本書の生れたことを祝福させてもらひます。東京にと思ひましたが、昨日のお葉書では若しや京都にお歸りに成りはせぬかと思ひ、お返事は京都の方へ書くことに決心しました。私の軀は可也に危い所を通過して居る様です。醫者なんかに言はせれば滋養分を缺かせてはだめだと申します。私には餘り病氣のことは氣には成りませぬが、未だ信仰が固まらぬのか淺薄なのか醫者の言ふことが、多少氣に成らぬでもありませぬ。不安な氣がします弱い意見の持主だとは悲みますけれど矢張軀の不安が附纒ふのです。どうかして滋養分攝取の必要を認めない軀でありたいのですが、しかし、今の私の軀は全然滋養分から離れては衰弱するのみだと思ひます。滋養分を頂いた結果は、非常に良い様です。餘り衰れませぬ所を見ますと結果はよい様に思はれます。それで、又々お金の問題ですが、大分以前から私は默つて、滋養分を攝らせて頂いて居ました。餘り富地の醫者が再三言ふものですから、お金の問題を氣にしながら今日まで出來るだけの尊い藥劑や、美味數いものを攝取して居ました。

日々幾らかの金が消費されて行くと思ひ又々無一物である可き親から、而も汝は獨立の奉仕の立場に居ながら、金の心配をかければならぬ心の苦しさ、折角の滋養分も反つて毒に化される様な時もあります。すべては、私の軀が病弱な爲め、ほんとの獨立が出來ないのです。私は奉仕生活（一燈園生活）と滋養物攝取を必要とする病弱の人との關係を考へて見ました。若し赦されぬならば、死ぬ覺悟してまでの修行である。（私は違存はない）死を恐れては修行出來ぬと申されても、私には違存はないのですが、餘りに寂しい此の世を思へば、此の小さないのりに燃えた私の軀も何者かにお役に立たしたく存じます。此問題を良くお考へ下さつて、お暇の節お答へ下さいまし。赦されなければ私は絕對に滋養を攝りませぬ。どうか此の消息をおもらし下さいまし。

私は如何に醫者が保證せずとも元氣です。（空元氣ではありませぬ）弱いながらの勇者です。立派に私は、自分の生活を建設して見せます。

それで若し、赦される樣でしたら、直接拂の分が三十五圓餘あります。會社で立替へてもらつてもよい様なもの丶、此の頃會計の掛りの人が代つたのと、會社から奉仕者へはお金を渡さぬことに成つたので、私だけ頂くことは、皆さまの修行を動搖させることに成りますから、どうか其の所をよくお考へ下さつて、若しお樂で御座いましたら、至急にお送金願へませぬでせうか。

よくよくお諒解下さいまし。

心苦しい私の立場をお察し下さいまし。醫者の言葉にも信を置けず、それで自分の信仰を强めることも出來ずに居る私の悶へには、何と言ふ忘恩的な日々であらう。お赦し下されませ。お赦し下されませ。

お忙しい父上様に、長い手紙を書き其の上御送金のお願誠に恐れ入ります。

節の序で、前述の問題の御解答お願申します。

終りに臨み御父上様の御健在を祈つて止みませぬ。お母上樣に宜しく、御無沙汰

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

お詫び下さいませ。(天香氏宛)

○米窪千代士兄(東京牛込山吹町一三三山岳堂内)　先生長く默つてゐました許して下さい。

本郷の教會でお會したのは實に嬉しく思つてゐます。先生や中桐先生のお話が未だ道に迷うてゐた私を考へさせ、救うて下されたことを書かせて貰ひます。

十九日の日ふと懺悔の生活を讀み出してうんとひきつけられてとうとう三日がかりで全部讀了致しました。そしてつくづく後悔の念にうたれてゐます。正直に告白致しますが私は一燈園に居つた時は先生を理解して居りませんでした。時時は失望致しました。そして昔の歌に「來て見れば聞くより低し富士の山釋迦や孔子もかくやあるらん」と云ふ歌がありますが天香さんも其の一例だなと心でつぶやいたこともあります。私は自分が人を愛し樣とは勤めずに人が愛して吳れぬ時はその人を憎んでゐたことを深く感じます。そして同人の缺點までも、先生の惡いせいにして不平でした。少しのことさへ大きく訴へて同情して貰ふ樣にも話しました。そればかりでなく私はみすぼらしい風姿にて美しい京都の市街を歩くのさへ恥しく思つて、[illegible]て居れば立派に食つて行けるのだぞ。なぞと怪しい眼でもつて見て居る人に眼でもつて答へてやつたことも忘れません。下駄を丁寧に揃へることは出來ても小僧さんのことを何々さんと呼ぶことも仲々出來ませんでした。考へると種々で並べられません。

私がこんなであるのに先生は私を愛して下さいました。そして私が徴兵檢査を機會に一燈園を出て獨立して奉仕の生活をしたいと當時奉仕の爲東京になられた處へお手紙を出した時、お返事に「眞面目に修養して下された」と書いてあつた、今後の相談にもなる樣種々話したいことがあるから東京へ廻つていらつしやいとも書いて下さいました。

あゝ私は實に恥ぢます。後悔して居ります私はあの當時は人のみをせめ、人のみを憎んでゐました。本當に零の位置に居らず、一の位置に居りました。私の樣な奉仕の仕方では一つすれば一つむり取し、二つすれば二つとつて仕舞ふことになります。結果は何にもなりません。それが今やうやく解りました。成長しようとする祈りよりも其日々々がほめられる樣に思ふことが重なる對象であつたことを懺悔して今やうやく先生を知つたことをお許[illegible]ことと思ひますがうんと祈つて進みますからどうぞ御指導下さい。(下略)(西田氏宛)

○本號表紙の題字は京都南禪寺所藏夢想國師と佛日禪慧禪師との唱和集より頂きました。

大正十年十二月十五日印刷(代金二十錢)
大正十年十二月十五日發行(郵送料不要)

東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行者　中桐確太郎

東京市神田區仲猿樂町十七番地
中外印刷株式會社代表者
印刷者　渡邊市太郎

東京市牛込區原町三丁目五十三番地
發行所　東京宣光社

○振替口座東京五七六七一番(牛込區原町三ノ五三　中桐確太郎)

○郵便爲替にて御送金の方は「牛込若松町局」

彼等の群れ

吉田暎二

一

AとBとCとは一軒の家に住んで居た。

その家は町から少し離れた田圃の中にあつた。がらんとした、大部古い家だつた。何處かしらん表から見ると寺の本堂の様な感じを、その屋根の形や、廂の恰好が與へた。北に向つた窓と南に向つた椽側の障子と、入口の戸だけがこの家の建具で、その外には部屋と部屋とを仕切る障子や襖は勿論、押入や戸棚の建具さへなかつた。三つある部屋はいつも一間の様に廣々として居た。眞中の部屋に電燈が一つあつた。夜はその下で三人が机を寄せて讀んだり、書いたりした。あたりはほんとに靜かだつた。犬さへ吠える様な事はなかつた。秋になると蟋蟀の聲が降る様に聞こえた。その聲がいつも、三人の心に絕え入る様な悲しさと佗しさを湧き出させた。さうした時に、よくBは立上つて次の間にある、佛壇の前に行つて、靜かな聲で讀經を初めたりした。又その聲がよく、Aの眼をくもらせた。

朝になると、三人は一緒に佛壇の前に行つて、禮拜をし、經を讀んだ。しつとりした朝の空氣は、心地よくその低い重々しい讀經の聲に震はされた。

朝餉は三人の中の誰れかゞ仕度をした。別に順番はなかつたけれど、凡そ順繰になつて居た。食後、三人は三人とも別々の方へその家を出て行つた。

或る時は三人一緒のこともあつた。二人だけ一緒の時もあつた。けれども多くは三人別々であつた。

家を出た彼等は、町の方へ行つた。而して、町の家々で、働らいた。水を汲んだり、方々の掃除をしたり、子守をしたり、子供の勉强の相手をしたり——その外何んでも、そこの家の喜ぶことをした。

或る家は彼等を怪んだ。或る家は彼等に遠慮をした。或る家は彼等を嘲つた。或家は彼等を疑つた。然し彼等の敬虔な、素直な眞實な態度は、暫く後に此等の怪みも、遠慮も、嘲りも、疑ひも、總てを消した。而して彼等はその家々の人々と共に樂しく働いた。初めて、彼等が一軒の家に行つて、何か仕事を惠まれると、彼等は、こゝに自分達の修業の道が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

展かれたことを感謝した。その家の人達と共に、愉快に働いて居る彼等自身を思出した時、自分達に同化した其家の人々を見出した時、彼等の心は、明く、微笑で滿されて居た。

そうして夜、歸る時は、彼等には、一日の疲れが養ひとなつて美しい花が咲いて居た。彼等は文字通りに法悅に浸つてゐる樣に感じた。彼等は互に力强く地を踏みしめて、家へ歸つて行くのだつた。その時、道傍に立つてゐる、あの唯物論の象徵のやうな電柱にさへ「おゝ兄弟よ！」と話しかけたい位の親しさを經驗すると、よくAは語り〳〵した。

夕餉が濟むと、彼等は心に、その一日を感謝し、來る日の祝福を願つた。夜は大抵机の前に彼等を見出すのを常とするが、奉仕（彼等は仕事のことをかう呼び習はしてゐる）の都合で、歸りが夜半になることも間々あるので、いつもさうとは限らなかつた。

二

Aは三十に近かつた。BもAと同じ位だつた。そしてCは二十で一番年下だつた。

三人は眞に人間らしく生きようとして、各の家から離れて出て、今の生涯に入つたのであつた。その先覺者はAだつた。Aは年若い頃から、種々實生活の辛い經驗に打附かつて居た。家の貧しい故もあつた。又兄弟のない故や父親を早く失なつた故もあつた。彼は中學時代に四ツの學校で寂しい、圓りの附かない學問をした。彼は心からの友達を持つ事が出

來なかつた。世間の人を或る距離をおいて眺める樣になつて居た。彼は又若い時分から物事を深くじつと考へる性癖を持つて居た。考へれば考へる程物事がわからなくなつた。人間が信ぜられなくなつた。種々雜多な人間が彼を取巻き、又彼の側を通つて行つた。彼は（人間といふものは別々のものだ。何といつても別々だ。總ての人が一人一人なのだ）と思つた。彼には彼以外の人の總てが彼にぴつたり接觸しないものゝ樣に思はれた。何とも云へない寂しさが彼を襲つた。彼は自分が全くの孤立である事を知つた。自分は右にも左にもよりかゝれないで、じつと立つて居なくてはならないのだと云ふ事を覺つた。彼は自己より外に信ずる事の出來る何物をも持たないと云ふ事を感じた。而してかうしたことが、反つて彼に誠のある生活、眞に人間らしい生活を眞劍に祈り出させる動因となつた。

せめて多くの親身でもあつたなら、その寂しさは和らげられたであらうが、其の時分、すでに親の一方（父）を失つて居た。其處には唯、身體の弱い母親が、彼の何よりの賴み綱として殘つて居るのみであつた。けれども母の收入――産婆と賃仕事をして居た――は彼の學費を拂ふに辛うじて足る程であつた。

「妾はもう死んだ氣になつて働らいて、お前を待つて居るのだからね……」

却して彼の生長に打ち込みきつて働いて居た。

丁度それは、群衆の雜踏の中で、うろうろとして居る母を唯一の頼りとして、その手にしつかりとつかまつて共にうろうろとして居る小供の姿をそのまゝであつた。

Aが中學校を出て、少し離れた町の小學校の敎員になつて初めて金と云ふものが取れて歸つて來た時、母と唯二人の一家には何年振りかの春が訪づれた。さし向ひの小さな膳の上には肉鍋がぶつ〳〵と煮えて居た。食後の談話にもいつにない活氣が母子の言葉に溢れて居た。

「これで妾も一安心さ。ねえ。」

と母は云つた。然しAは

「まだ〳〵。是からではありませんか。小學校の敎員位では何にもなりませんよ。」

といつた。Aの前には廣々とした大海が展がつて見えた。其處に一目散に乘り出して行く彼自身の姿の勇ましさが思はれた。希望と抱負が、彼には漲つてゐた。

けれども、其の希望も抱負も、片端から、實世間の荒波の中に卷き込まれて行くのを感じたのは、さう遠いことではなかつた。

小學校に入つて、二年目にAはもうその學校を飛び出して居た。それを聞いた母親は心配して、

「お前の世間見ずにも困る。世の中は皆さうしたものだから。」

と云ふ樣な意味の手紙を送つた。Aはそれに對してこんな返事を書いた。

「でも、餘りに非道いのです、まるで眞實と云ふものがないのです。あのまだ生れて十年になつたかならないかの生徒達に、敎師の悉くが虛僞と、手前勝手で對して居るのです。總てが吳魔化しなんです。生徒が、子供で何も知らないのを良い事にして居るんです。まるで、敎會の惡い奴がわからずやの田舍者をだますのと同じなんです。あんな敎育をうけた子供達は、矢張りあゝ云ふ敎員達と同じ樣な人間達になつて行くんだと思ふと、恐ろしい位です。これでは何時迄も、世の中は善くならないと思はれます。校長にしても、主席にしても、又其外の敎員達にしても、皆私を異端視して居るんです。それは私が全然自己を子供達の前に投け出して、其處から湧き出す二つの魂の間の理解を基礎として子供達を敎育しようとして居る爲めなのです。他の敎員は、私に、それでは敎員の價値が下るから、もつと威張つて、偉らい樣な樣子をしなくつてはいけないと云ふのです。又、君の其價を知る丈け子供達は進んで居ないよ。とも云ふのです。何と云ふ事でせう。敎員が威張る必要が何處にあるんでせう。それに「偉い樣な樣子」をしろなぞとは、お話にならないではありませんか。偉くない人間はいくら偉がつても、益々滑稽になる丈けで、少しも偉くは見えるものではありません。又彼等は子供達が私の眞價を知る事が出來ないと云ふのですが、私は何も私の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

「眞價」なんぞ知つてもらはなくてもいゝのです。私は子供達の智慧だけで理解出來る處まで理解して呉れゝばそれで結構だと思つて居たのです。一體「人の眞價」なぞ、何んな偉人にだつて知れるわけのものではありますまい。かへつて、小學校位の子供の方が、其人について、確かなものをつかむかもしれません。私には西洋の或る文學者の言つた樣に、子供は神に近いと云ふ事が全くほんとの樣に考へられて居るんです。折角馴染んだ多くの子供達を見捨てるのは殘念です。二年の間毎日私があの灰色をした學校へ行けたのも、偏に運動場に樂しさうに遊んで居る子供達のお蔭です。教員室で、何んな氣まづいことが他の教員達との間にあつた時でも、ガヤ〱とざわめいて居る教室に入つて行くと、私の心はいつも樂園に遊ぶ樣な愉快さと晴れ〱しさを感じました。何んなに騷々しい時でも、私が入つて行くと子供達はぴたつと靜まつて呉れるのです。而してその瞬間から私を信頼した、總ての愛らしい眼が一度に私の方へ向つて注がれてくるのです。さうした時、よく私は、子供達の前に、跪きたい樣な氣さへしました。この小さな信頼者に向つて他の教員の樣に何うして威張れるでせうか。彼等は子供の尊さを知らないのです。子供を通して表はれる魂の閃きに盲目なのです。頭から子供を考へないで居るのです。私は私の去つた後の私の受持の子供達を考へると、涙が滲じみます。然し仕方がありません。他にもう一つ私が何うしても彼所から飛び出さなくてはゐられない事があるのですから。と云ふのは、校長や他の教員達の行ひの事です。私はこれが見て居られないのです。二年間隨分我慢を重ねて來ました。けれども、到頭我慢が出來なくなつてしまつたのです。教員の殆ど總てが校長に阿諛を使ふのです。それが自分の給料を上げて貰はうとする爲めか、免職を恐れてる爲めである事は、云はないでもわかりきつた事です。それで居てお互の間では校長を惡く言つたり、少し他人が重く用ひられると、險しい眼で是を眺めたり、かれこれ言つたりするのです。互に口ではうまい事許り言つて居ても心は別々になつて、銘々利己の爪を磨いて居るといふ有樣です。私は是を見て淺ましいと思ひました。私は何うしても、此教員達と一緒に仕事は出來ないとあきらめました。まるで校內は砂漠の樣な、眺めるものもない茫漠とした、寂しい荒野だと云つてもいゝでせう。其處には溫みがなく又血が通つて居ません。又太陽も照つてはゐないのです。常に灰色に渴いた大氣が淀んで居るのです。而してその中に、無數の餓鬼がお互に眼を光らせていがみ合つて居るのです、まるで地獄です、餓鬼道地獄其まゝです。…………

それに校長も校長です、職員達の附屆けを平氣で受納して居るではありませんか。而かも、其多寡によつて待遇の違ふのは勿論なのです。それ故そんな事をしない私はまるで小供扱ひです。それにまたこんな事もあつたのです。校長の家に寄寓して居た私は校長から教員のZへの手紙の使を何度とな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

くさせられました。それが、實はZへの手紙ではなくZ夫人に當てゝの手紙なのです。私も初めは氣がつきませんでしたが校長もZ夫人とは夙に關係して居るのだと云ふ事を知つたのです。而して、その手紙の往復に私を使つたのだと云ふ事を知つた時、私の驚きは並大抵ではありませんでした。私はそれ以來ずつと校長の嶮しい眼を忍びつゝその使を斷つてしまひました。處がZが自分の妻君と校長との事を知つて居乍ら平氣で居るのだといふ事を知つた時、而かも、夫婦の間に既に諒解があるのだと云ふ事を知つた時、又その頃學校でZが眼に見えてあらゆる方面に重く用ゐられる樣になつたのを知つた時、私は私の感覺を疑がつた位でした。私は野原に駈け出してそこに身體をたゝきつける樣に倒れると、眼を閉ぢた儘轉がり廻りました。私は人間の淺ましさを感じて、心は涙で一杯でした。私は大地にしがみついて、心から神に祈りたいと思ひました。右を向いても左を向いても汚れた空氣で埋められて居たのです。

それでも我慢して居ました。邪淫な校長の眼をも、虛僞と卑劣に爛れた敎員達の眼をも、忍んで。然し一つの最近の事で私は到頭飛出して終つたのです。といふのは今度校長が、女敎員のEに手紙を送つたりしたのです。而してその手紙には必ず私の名前を利用すると云ふ事が知れたのです。私は夫れが知れると自己をふみつけられた樣な、一種の侮辱に對する怒を覺えて、校長に向つて嚴重に談判したのです。すると校長は唯、兩手をついて、私の前に禿げた頭を下げてあやまる許りなのです。而して、そつと拾圓紙幣を私の袂の中へ入れ樣とするではありませんか。

もう是れ丈けで澤山でせう。この腐敗や虛僞や陰險や邪淫な空氣の中に私はどうしていつまでも居る事が出來ませう。と云つて、是等の空氣を矯正する丈けの力も、勇氣も希望も、今の私には到底求める事は出來ないのですから、私の方で退くより仕方はありません。

もう私も再び敎員生活には入りますまい。然し御心配は入りません。必ず一人で身は立てゝ行きます。ほんとに生き通して行つて見せます。而して母さんの方にも不自由をかける樣な事は致しません。世の中には人の進むべき路が幾らも擴げられて居ますから。必ずその中には私のほんとうに任める處が見出されます。希望の第一歩に失敗し失望した私は、中途半端の滿足と安住を得た人よりも何れだけ幸福だか分らないと云ふ事を考へて下さい。失敗し失望して、初めて周圍に擴がる森羅萬衆に氣がつくのだと云ふ事を、又、これからの目當に向つての眞劍さを增すのだと云ふ事をお考へ下さい。」

三

それから五年の間Aは東京で放浪した。その間常に次から次へと種々の職業や業務に携はつて居た。彼の心は常に叫んで居た。(何うかして身を立てたい。一かどの人間になりた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

い。眞に生きたい。而して母さんに樂をさせたい)。然し何れの場所にも、二年とは永く居なかつた。何處も彼の安住の場所ではなかつた。此處こそは、と思つて飛び込んで行くと、矢張り其處にも虚僞があり、輕薄があつた。眞の生活を望んで居た彼はどうしても斯ういふ場所には居られなかつた。彼の心はかうして憤りに、恨みに、驚きに、悩みに鎖された。時には努めて自己をあざむき、彼の嫌ひな空氣に同化しようとしたりした。然し其時、彼の心の底に蟠まつて居る寂しさがその妥協心をはじき返した。

彼の心の寂しさは少年の時から年を經るにつれて、更にその濃度を增して居たのであつた。

しかし彼は心に、心の奥底に彼の望むやうな、誠實な人々の居る場所があるに違ひないときめて居た。そこでこそ、彼が身を立て、母を養へるのだと信じて居た。この彼の理想と信念は、容易に彼から滅却する樣な事はなかつた。それでこそ一つの場所に不滿なれば第二の場所へ飛込んで行つたのであつた。

或る時は物質的にのみ、勇ましく駈つて行く人々を彼は見た。時に彼等は數千の札束を手にもつて立つて居た。是れを見て彼も亦共に走らうかとも思つた。然し、それ等の人々が忽ち、暗い深淵の中へ落込んで行く樣を見た時、彼は物質的榮華の案外にふがいない事を感ぜずには居られなかつた。而して自分の求めて行く路はこの路ではないと思はずには居られなかつた。

(それでは知識の世界か、哲學なのか、科學なのか)と彼は考へた。素養の足らない彼には、容易くその堂奥を究めることは許されなかつたが、それでもこり性の彼は懸命に勉强した。夜になると、彼は無料圖書館に入つて專門書を前に置いて居た。然しその研究も彼の本心から求めるものには、シツクリ會はなかつた。夫れを知ると彼は宗教を考へた。而して、基督教にも、佛教にも頭を突き込んだ。然し、是も彼の素養の淺い爲か、徒らにその皮相をのみ眺めた爲めか、又彼の心の奥底からゆり動かす力によつて導かれなかつた爲か、何れも彼に滿足はあたへなかつた。何れもこれも徒らに現世を沒却した死の國の教、來世の教へとのみ考へられて、現世の實生活に悩みを持つて居る彼には、餘りに緣遠いものに思はれた。其の頃から彼は漸次自らの信念に疑を持つて來た。

(世の中には眞に自分の望む樣な誠の世界がないのではなからうか)と彼には思へて來た。(少なくも、此の五年の間に通り過ぎた世の中にはなかつた。教育界にも、物質界にも、學問の世界にも、宗教の世界にも。而して、自分には此等の世界が人生の總てを包含して居る樣に思はれる。さうすれば自分の生きて行く路はないのであらうか。矢張り信じ得るものは自己丈けで他にはないのであらうか)

彼は不安を感じた。寂しさは一層增して行つた。それと同時に彼には五年間の人生の苦鬪からの疲勞が滲み出て來た。而

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

してそれが彼を絶望の底へ落し入た。

丁度其の時分であつた。彼の成功を待つて居た母は田舍で彼の歸るのを待たずに、看護らしい看護も受けないでみじめに死んで行つた。此處で彼が母を精神的にでも樂にさせ樣と思つて居た目的の一つは失はれて仕舞つた。彼は自分の容れられない世を呪はしく思つた。彼は母を樂にさせられなかつたのもこの世が惡いからだと思つた。彼の心の寂しさは、その極點にまで達した。母を葬ふ爲に田舍へ歸つて來た彼はぼんやりと、空を見つめて居る樣な日が半月もつゞいた。其の間彼には何事も考へられなかつた。何物も彼には邪魔であつた。幾日も〳〵胸の中にふつ〳〵と沸ぎる焦らだたしさをじつと抱いたまゝ、空を見て居た。まざ〳〵と生の倦怠を彼は感じた。死の幻影は何處となく彼の周圍を飛びまわつた。それは丁度四方壁で圍まれた、狹い暗黑な空の中に居るのと同じだつた。彼は幾度、それから逃れ樣としてその厚い壁にぶつかつた事であつたらう。彼はこの壁一重越せば光が見えると思つた。而して、一所懸命に身を四方の壁にぶつけた。しかし、壁は彼の體より强かつた。彼はどうすることも出來なかつた。彼はすつかりつかれて了つた。もう立つて居る事も出來ずに其處にへたばつてしまつたのだつた。然し光明を欲する心持は更に〳〵つのる許りだつた。彼は床をかきむしつて、暗黑の中をにらみつけてゐなくてはならなかつた。其處へ偶然に閃いた或るものがあつた。

(自分は間違つて居たのではあるまいか)

それは暗中の一光芒の如く彼の胸を射通した。その一光芒は、漸次に擴大されて行つた、くるり〳〵と廻りながら。彼はじつと、そのまばゆい光芒の中を見つめて居た。彼の心は或る叫びを聞いた。

(間違ひだ。確かに間違ひだ。自分は初めから間違つて世のあらゆる方面に入つて行つた。然し、何處も、彼處も、自分の根けた理想には遠い、自分とは肌のあはない所許りだつたその爲めに終に今まで、こんな樣で過してしまつたのだ。自分は、眞の誠の生活をしたいと思ひながらも、その場所のない爲めに、母をも安心さす事なしに死なして終つたのだ)

考へれば矢張り自分の弱い爲だ。消極的の態度の爲めだ。自分はもつと以前になぜ、勇敢にアクティヴな行爲に出なかつたのであらう。いや、その時分は、一つの場所に失望したら、是れをなげ棄てゝ第二の場所に行くのこそ勇敢なアクティブな行爲だとのみ思つて居たのだ。他に求むるものがなければ自分でこれを造り出さうといふことは今まで少しも氣がつかなかつたのだ。

自分は是から自分で自分の求める眞の生活をしなければならない。眞は何處にもない、矢張り自分の中になくてはならないのだ。それに氣付かずに迷つて居た自分は何と云ふ腑甲斐なさであらう。この間に犯した自分の罪は何れだけの多數になつて居るかしれない。母を逆境と不滿に沈ませ、悲嘆に終

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

らせたのは自分だ。この罪だけでも、終生是を拭つても、拭ふ事の出來ない大罪だ。自分は罪人なのだ。自分が今まで蔑んだ人々と何等變る所のない罪人なのだ。而も世は、この罪人をも今まで、とがめる事なく生存させて呉れたのである。自分は罪をつくりつゝ、四圍から諸々の宏恩を被つて居るのだ)

彼は、あまりに、世間的名聲を求める心によつて培(つちか)はれた自分自身を顧みないわけには行かなかつた。又此處に彼の歩んだ神も佛もない荒涼とした罪の生活を悟らないわけには行かなかつた。◎

世の人々と自分とは少しも異る處がないのだ、たゞ今まで自分は假面を覆つて來たまでの事だと思ふと同時に、彼は世の中の人々に向つて滲み出る樣な愛着を感じた。嘗ては彼が近寄るのも穢らはしく思つた人々に對して、此方から寄添つて行きたい樣な懷しさを覺え出したのであつた。

けれども依然として寂しさは彼の心から取りのけられる事が出來なかつた。然しその寂しさも、この世のあらゆる人々を愛したい、人々にすがりたい、人々と共に歩みたい、といふ心によつて慰められ明るくされた。彼にはこのにじみ出る心持が何となく有難く感ぜられ、感謝し、拜みたい樣にさへ思はれた。彼はふと思つた。

(これが神ではあるまいか。佛ではあるまいか)

彼は一切の思慮を絶した、神といはうか、佛と云はうか、この一種の信仰にめされたのであつた。彼は彼の心では神とも佛とも考へられるこの心持の前に一切を投出して――生きようとする要求さへも擲つて、懺悔し、仕へなければならないと思つた。其處に坦々として横る一白道が見出され、眞の生活が始まるのだといふ事を知つた。彼は初めて眞の生活を知つた。即ちそれは一口に云へば出家だつた。然しその出家も形に於て沙門の姿になるのではなかつた。心に出家するのであつた。全體を以て世の人に奉仕し、身は常に無一物で菩提心を以て長く横る一白道を進む事によつて、懺悔報恩の生活を送るといふ事であつた。其の一白道とは、沒我奉公の托鉢であつた。

彼には懺悔の心は慧日の輝きであると云つた佛の心や、托鉢行乞こそ、沒我滅罪の法であると云つた佛の心が如實に了解出來た樣に感じた。

四

光明を感じ、心に出家し、眞の生活の所在を知る事の歡びを得たAは、それから半月許り後には、町の家々にその粗末な托鉢姿をあらはして居た。

嘗ては廣い世界に自己の孤獨を嘆き、周圍の無關心を呪つた彼の心は、段々彼からは取り拂はれて行つた。新しい力に甦りつゝある自己の姿を見出す事は、彼自身にも不思議に堪へなかつた。

(自分は拜まなくてはならない。世のあらゆる人々、夫れは矢張り自分と同じく罪を持つた人々の爲めに、彼等と共に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

働き、彼等の爲めに働き、互にゆるし合ひ、光を拝み合つて行きたい」

彼は、常にこの本願を持つて、家々に下僕の如く働いた。町の人達は大抵、彼を知つて居た。彼が母の病中にも、その臨終にさへも歸らなかつた事について、町の人々はよくは云はなかつた。

「不孝者だな。五年も前に家を飛び出したきり、一度も歸つて來ないんだからな」

「さうさ。その五年の間だつて、金一文送るでなしさ」

處が一年許り後に町に現はれて方々の家に働く彼の姿を見た時、町の誰れも彼も驚きの眼を見張つた。

「なんだいAは氣でもふれたんかね」

「でも眞面目に働いて居るよ、どういふ氣かね」

「だから氣がおかしいかもしれないよ」

「然し氣の變な處は少しも見えないがね。何か仕事があつたらさせて下さい。と云つて、入つて來るんだ」

Aは何事も多くは云はなかつた。而して行なつた。これが町の人々の不審の容易に消えない理由でもあつた。

「何故に」といふ問に對して、彼は「佛樣の爲めに」と答へたのであつた。彼は常に、爲てやつて人の喜ぶ事、自ら爲るのを人が嫌ふ事を爲ようと心がけた。

其時分或る老夫婦の家にAは毎日行つた。息子に死別れた二人の老人は、佛の使の來るのをまつて居るらしく淋しく暮して居た。息子の命日と祖先の命日には二人は連れ立つてS寺へ行つた。これが二人の第一の樂しみであり慰みであるらしかつた。Aは其處で水も汲み掃除もし、炊事もした。其家の唯一の收入である麻つなぎに老婆の手傳ひもした。二人の老人はAを有りがたがつた。

「どうも有がたうございます」老婆は云つた。Aも

「いゝえ私こそ佛樣の爲に働かせて頂いて有りがたうございます」

と云つた。

暫くの間に、二老人の佛に對する信仰は、ます〳〵強く淨らかになつて行つた。二人は毎日の樣に寺に行つて手を合せた。夫れは上べばかりの信仰でもなく、安價なあきらめの爲めの日參でもなかつた。死んだ息子の爲め、祖先の爲め而して自分達の未來の爲めに、ほんとに佛に憧がれが持てゝ來た爲めであつた。

暫く經つてから、Aはこの家から他の家へ行くことにした。彼は成るだけ多くの家に入つて、種々な仕事をさせて貰ひたかつた。又多くの家に入つてその家の中に何物かをもたらしたかつた。彼は自分が行つたゝめに、その家の悪くなる樣な事はないと、確信して居た。

別れ際に老婆は彼に、息子のを直したのだからと云つて着物を送つて呉れた。彼は叮嚀に合掌禮拜してそれを受け取つた。

「私が働かせて頂いた爲めに、頂戴するのではありません。佛樣への御供養として頂戴致します。私は長くあなた方を拜ませて頂きます」

彼はさういつて別れた。

彼は衣食住には念を置かなかつた。世の中に、食に、衣に、家に、困つて居る人々の居る事を考へた時、彼は、佛の云ふ日中一樹下一宿も、もつたいない位に思はれた。彼は多くの働きに行つた家で食物の供養を受けた。着物は、出來るだけ粗末なのを着て居た。それには、何んな家に行つても差支へない樣にとの考へもあつた。家は元の町端れの家に寢泊りをして居た。けれども家賃は一文も拂へなかつた爲めに、家の持主は彼をよくは云はなかつた。彼はこれをすまなく思つたが、又一方に、それを淺ましく思つた。然し自分がもつと淺ましい罪の人間である事を思ふ時、そのひそめた眉もひらいて、只管自分の罪障を佛に謝したのであつた。

その頃からAは生活をしつかりと、させたい爲めに、經文を讀む事を始めた。毎晩の樣に、町のS寺に行つては、其處の藏經を見せてもらつた。

「四十二章經から讀んだらいゝでせう」

住持は云つて呉れた。Aは四十二章經を、寺の庫裡の片隅で讀んで行つた。時々彼は高い聲を立てゝ續經した。その聲が、がらんとした庫裡の靜寂をふるはせた。

「佛言人有衆過。而自悔頓不息其心。罪來赴身。如水歸海漸成深廣。若人有過。自解知非。改惡行善。罪自消滅。如病得汗漸有痊損耳」

これを讀んで行く眼には涙がにじみ、經卷を持つ手はわなゝいた。

日を重ねるに從つて、その經を誦する聲は、漸次にその聲量を増し、威嚴を加へ、知らぬ人も動かずには居られない樣な強い力をあたへられて行つた。彼の頭は澄み、心はしづまり、一日の托鉢の疲れもほぐれて行く樣にさへ感ぜられた。彼の容貌は次第に溫和に而して豐かになつて行つた。つゝましやかな、すなほさもその眼の光に見る事が出來る樣になつた。

愉快な日が續いて居た。流れる朝日の中を町へ歩いて行く彼は、心に懺悔文の默誦を忘れなかつた。日光を浴びた其姿は、見る人に、一種のなつかしみのある、神々しさを覺えさせた。人々は（それAさんが通る）と云ふやうになつた。

「お早う御座います」

と通りがゝりに見知らぬ人から聲をけかられる事もまゝあるやうになつた。Aはそれに一々叮嚀に頭を下げた。

彼はどんな貧しい人から挨拶された時でも、もつといゝ家でされた時でも同じく叮嚀に挨拶をかへした。彼は自分の目下の人々は、又自分がそれに對して誇れる人々は、此の世の中には居ないと思つて居た。

（誰れにも彼にも自分は恩を被つて居るのだ）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

彼は斯う思つて居た。
半年は過ぎて行つた。Aに對する町の人の理解も進んで行つた。嘲笑や疑は一日〳〵少なくなつて行つた。
「Aさんは偉いね」或る人は云つた。「物好きや氣散じぢや出來る事ぢやないからね。佛樣の爲に、あゝやつて働くのだ。私共は佛樣の爲めと云つても、あゝはやれない。いつもお賽錢を上げたり、講中に入つたり、奉納をしたりはするが、無理なお願ひばかりするんだ。それで、佛樣の爲めに何がならう。Aさんの樣に自分の身を佛樣に捧げて、働くのこそほんとに佛樣の爲になるのだ。佛樣も、Aさんの樣な人に幸ひをお授けになるだらう」

これを聞いたAは云つた。

「お賽錢を上げたり、講中に入つたり、奉納をしたり、お願ひをしたりするのは惡い事ではありません。唯、その人の心だけの問題です。殊に佛にお願ひするのは決して惡い事ではありません。私達は一方に運命に支配されます。而して他の一方に自己の願ひと云ふものがあります。これは常に一致するものではなく、又その爲めに互に無關係に見えるものですが、然しそれは無關係ではありますまい。その間を結びつけるのが、佛へのお願ひです。祈願です。祈願は運命を左右する事があります。又或る時は立派に、是れを創り出しもするのです。私の佛の爲めの働きは、同時に佛への祈願でもあります。又同時に自己の爲めの働きともなります。總てはそれを行ふ人の心の問題です」

この話はその人によつて、町の諸方に語り傳へられた。人々はAを漸次尊敬する樣になり、愛する樣になつた。Aは人々が自分を敬ふ樣になつた事を知つた時、その心にふと誇りを感じた。然し、次の瞬間に、彼は之に氣がついて、心に悲んだ。(何の誇る處があるのだ)、彼は自分自身に叫んだ。彼は暫くの間合掌し、瞑目し、口には經文を誦した。彼には常にこんな小さな逆戻りがあつた。これは或る時は殆ど自覺されない程の些細なものであつたけれど、彼はこれが些細なれば些細である程、それを畏れ、悲しんだ。ふと腹を立てたり癡にさへたりする事は日に何べんとなくあつた。彼は其度に反省し、佛に謝した。こんな事の重なつた日には殊更、夜S寺に行つての讀經が長く續いた。

彼は托鉢行乞の間に、靜かな心で世の轉變や無常や腐敗や墮落や、その他の種々相を見つめる事が出來た。世の到る處が貧、苦、病で埋められ、罪の世界であるのを感じた。互に徒な生の爭鬪に血塗れになつて、虛僞の勝利を夢見て居るのを知つた。惡は惡同志互に相手を踏付けようとあがいて居り、世を茶化した醉どれは、革囊衆穢の輩と、酒肉の亂舞に日を暮して居るのを觀た。この實相を眺めては嘗ては彼も亦、この「迷」に脅かされて居たのだと云ふ事を思ひ出さないわけには行かなかつた。

彼れには世のあらゆる罪惡が、又彼の罪惡である事を否め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

なくなつて來た。世の罪惡は益々深く彼の身にまつはりついて來るのを感じた。それと同時に、愈々佛の前に手を合せなければならなかつた。

五

Aが懺悔奉仕の托鉢を始め出してから、一年半は過ぎて行つた。その間、彼の務めは一日も忘れらるゝ事がなかつた。方々の家々は彼の見舞を受け、彼から何物かを與へられた。或る家では、その家族の不和が彼のその家に行つての敬虔な働きによつて、親睦になつた。嘗ては、笑聲一ツ洩れなかつた家から晴やかな笑聲が聞こえる樣になつた。無信心と强慾で名高かつた、町のある大家では、彼の托鉢に會つて、毎日主人が佛壇に向ふ樣になつた。近所の人々は、その家から朝晩洩れる鐘の音を耳にして、不思議さうに顏を見合はせた。Aの通つた後には常に何物かの種が蒔かれて居た。彼の通つた後に漂ふ温い流れは、其等の種を培ひ育てゝ行く樣に見えた。Aはかうした有樣を見てさすがに樂しかつた。樂しいにつけ彼は愈々勵んだ。愈々佛の前に身をひれ伏し手を合はせた。

その時分に、ひよつくりとAの許へ現はれた男があつた。その男はAと共に、托鉢に歩きたいと云つた。それがBだつた。Bは町の屈指の長者の息子であつた。嘗て、Aは彼の家に行つて、三四日働いた事があつた。その時からBの顏を知つて居た。Aは思ひがけなくこのみすぼらしい、細い、然し間違ひのない正しい道を歩んで行かうとする同行者の現れに事を感謝せずには居られなかつた。Aはその時云つた。

「えゝ、御一緒に托鉢を致しませう。私は何も申しません。あなたが何故に、私の許へ御出でになつたか、その理由も御尋ねは致しません。佛樣に懺悔をなされば、それで結構です。その內には、私も知る事が出來ませう。この私の生活には一體規則も何にもないのですが——別にかくあるべしなぞと云ふ樣な事は申しません。唯、自分で自分が罪ある身である事さへ自覺されゝば澤山です。佛樣はお守り下さいませう。あなたは惠まれた方です。又あなたの新生によつて、あなたの家の人々も惠まれませう」。尙Aは續けた。

「然し、これだけはお尋ねしたいのです、あなたは、家の方々、殊に御兩親の了解があつたのですか」

Bは答へた。

「父は私の新生活に入る事をゆるしました、けれども、母はゆるして呉れませんでした。私が思ふのに、父も母も私の心持はよく了解して呉れたのですが、母は世間の外聞や、噂を恐れたのだらうと思ひます」

「それなら結構です。世間の噂を憚つていらつしやる阿母さんも、今に喜ばれる時を御持ちになる事でせう。この生活に對する御兩親の誤解さへなければ結構です。人の口や世の噂なぞは、人々によつて、不自然に造り出されたものですからいつか事實へ眞理の前には兜をぬぐにきまつて居ます。こ

にかゝる事があつたら、よく私も申上げませう」
「それに私なぞは、世の罵詈や嘲笑のどん底にひたりきつて居る人間なのですから、今さら世間や噂を心配する樣なことはないのです。……」
さう云つたBの首は下つて、眼には涙があつた。肩はぶる〳〵と波打つて居た。Bは明かに亢奮して居た。Aは遮ぎつた。
「今はこれ以上聞く事はやめませう。我儘の樣ですが、私は自分の過去を話すのが嫌ひな樣に、人の過去を聞くのも嫌ひなのです。折にふれ、漸次伺ひもしませう。總ての人の過去は、總て同じ樣に『迷』と『慾』の幻影に操られた罪の生活ですそれは極り過ぎる程に極りきつた事です。私はこの罪の爲に佛を拜むのです。」
その翌日から、AとBは連立つて町へ出た。而してAと共にBは或る家で働いた。夜になつて、AはBと一緒にいつもの樣にS寺へ經文を見せてもらひに行つた。その晩寺の庫裡からは、朗々としたAの聲と一緒にBの細い弱々しい聲が響いて居た。
BがAと一緒に托鉢に歩く事は町の人を驚かし、彼等の間に物珍らしい一事件として語られるに十分であつた。
「Aさんと、Bさんが歩いて居るとさ」
「あの道樂息子がかい。一體何う思つたんだらうね」
「なんでも、例の女に捨てられだんだとさ。それで、ぼんやりして終つたらしいよ。なんでもつく〴〵つまらなくなつてしまつたんだね。それなんで、あゝやつて穩ならしい着物を着て、働く樣な心持になつたんだらうよ。でも女も非道い奴だね。あれ程Bさんが騷いでたのにねえ」
「全くだね。Bさんだつて、あんな事でも初めたくなりまさあね」
「さうさ。それにね、女はもうこの土地にや居ないんだとさ。いゝ旦那が出來てね、U市の方へお妾になりに行つてしまつたんだとさ。いくら商賣とは云ひながら、全く實がないんだね。然し、どうせ其處にだつて、長く居られる氣遣ひはないさ」
「そりやさうにきまつて居るさ。でもBさんにもいゝ戒めだね。あの女と一緒になつた處で、いゝ事はないにきまつて居るものね。それに藝者なぞを、家に入れる樣な親父さんじやないからね。今までだつて、Bさんが町の馬鹿者や、道樂者のお手本の樣に思はれて居たのを、あの阿父さんはどんなに心苦しく思はれて居たか知れないやね。阿父さんもほんとに安心したらう」
「それにBさんのは唯の堅氣になるんじやないし、あゝやつて、佛樣の爲めに、罪滅しをするんだからね。どんなにいゝか知れやあしないよ。又お連れがAさんなんだもの、大丈夫さ。」
こんな話は町の人々が顏を合はせると、始まつて居た。中

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

には、

「好かれても居ない女に、散々引張り廻されて、その揚句おさらばを喰へば世話はない。どこまでも二本棒の意氣地なしのお手本さ」

と罵る人もあつたけれど、多くの人々はBに同情の言葉を洩らして居た。老人などの中には、Bの托鉢姿を眺めて、

「お大家の若旦那の身であり乍ら……」

と涙を催す様な人も居た。Aは、彼の耳に入るBの噂が、多く彼に對する同情の言葉であるのを嬉しく思つた。

町の種々な話でAも、Bの今までの生活を自然と知る事が出來た。或處でAはBが中學校を出て二三年たつと藝者買を始めて、その時分お酌で居たS子と云ふ女に戀したと云ふ事、その女を一本にさせる爲めに親の金を盗み出した事もあつたと云ふ事、その後も三日に上げず遊びに行つて居たと云ふ事等を聞いた。又或る處ではその女は別にBの事を戀して居たわけでもなく、小遣とり位に思つて居たらしいと云ふ事や、Bの外にU市の金持が旦那に付いて居て、その旦那は一週間に一度づゝ彼女の處へ來たものだと云ふ事や、今度その旦那が到頭彼女を落籍させて、U市の方へ連れて行つてしまつたのだが、その時に女がBに手紙を一本やつただけだと云ふ事なども聞いた。その後のBの憤怒や懊惱や落膽や絶望や憂欝の慘々しかつた事もAは或處で耳にした。

Aはじつと考へた。彼の過去の生活には少しも、Bの過去の如きものがなかつた事を考へた。Aには夫れが寧ろ不思議の様に考へられた。彼はBを見、Bの前の生活を知つて初めて女と云ふものが彼の眼の前に力強く現はれて來た様に思つた。彼はBに對して、批判を下す事も、その苦悶懊惱を的確に想像する事も出來なかつた。

（兎に角、これも「迷」と「慾」との幻影に過ぎない。誰も彼も苦しみ悶えなくてはならない一つの幻影に過ぎない。けれども、今まで一度も感じた事のない戀と云ふ心持に對しては自分は何も云へない。然し、自分も女を見て、他の誰れでもが一瞬に感ずる様な心持ちは何度となく持つには持つた。唯それが、戀とか愛とかいふまでにはならなかつたに過ぎなかつたのだ。女に對する深い戀や愛によつて醸される罪だけでも犯さなかつた事を、自分は寧ろ謝さなくてはならない）

然し、彼は何となく物足りない感じを持たないわけには行かなかつた。（又自分の逆戻りが來た）と思ひ乍らも、矢張りBは弱い人間なのだと彼は思つた。AはBを哀れみの眼で見守る様になつた。半月も經たない内に二人は百年の知己の様な親しみを感じて居た。毎日々々が愉快な温かな空氣で彼等を包んで居た。町の評判は、彼等に對する好意や同情のみを示す様になつた。誰も、彼等の談話に心好い笑顔と、篤い心を以つて對してくれた。然し未だ彼等を知らない人はどれだけあつたかしれなかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

かうして又一年が經つて行つた。Bもその生活にすつかり馴れて、同じ歡喜が彼にあつた。彼を通してせまる種々の罪業邪惡の數々は、彼に暗い影や、心苦しい悶えを投げかける事があつた。然し、その時にいつも佛の光が、それを照して彼の心を明るくした。彼の心から佛の前に讀經し、懺悔する心持は一日〳〵と深くなつた。

彼は彼が嘗て、遊び廻つた料理屋や、女の家の附近にも何の苦しみもなく、行ける樣になつて居た。或る時彼は云つた。

「今になつて、彼等の醜さや、穢なさを知りました。少しも心は動かされなくなりました」

それを聞いてAは云つた。

「その心持はよくわかります。然し、もつと心を清くして見なければならないでせう。今の樣なあなたの心持では、またいつ、彼等が美しく見え出すか知れません。私は女をよく知りません。然し私は彼等の樣な汚れた女も、清淨な處女も一緒に見たいと思ふのです。總てを一つの佛の光に浴した人間に思ひたいのです。私達が處女を敬愛する如く彼等をも愛したいのです。私からいやしい人として見る事の出來る人は考へられません。彼等が罪の人ならば私達も罪の人です。彼等は唯、自覺して居ない哀れな呪はれた人なのです。私達は拜まなくつてはなりません。自他もろともの罪の爲めに」

以前に一緒に遊んだある女は、

「まあBさんの容姿は……」

と云つてBの粗末な着物を見て驚いた樣に目をみはつた。無量の感慨や追憶が彼女に集まつた樣であつた。その女は四五日たつて彼に着物を贈つて來た。

「失禮ですが、この着物を差上げたいのですが……」

女は涙さへ浮べて、其處にじつと立つて居るBに云つた。

「有り難う御座います。種々御世話樣になつて、有り難く御志は頂戴致します。御恩返しはその内にさせて頂きます」

「まあ……」

女は顏を赤らめて、うつ向いてしまつた。Bの心はなぜかふら〳〵と燃え上つて來た。それでも彼は、無言のまゝ合掌して口には經文を誦した。而して、その着物を叮嚀に受け取つた。然し落付かない心持を、彼はどうする事も出來なかつた。

三四日經つて、Bの姿はその女の家に見えた。彼は其處で尻を端折つて水を汲んだり、拭き掃除をしたりした。女は居たゝまれない樣な氣の毒さを覺えた。彼女はすまないと思つた。

「私にも一緒にさせて下さい」

たまらなくなつて、女はBと一緒に働いた。夜になつて夕飯を供養されて、Bは歸つて行つた。女は彼の歸り際に、

「どうもありがたうございます」

と云つた。然しBはそれを遮つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

「いゝえ。私こそ、ろくに御恩返しも出來ませんで。」

女はBと一日働いて、身體が疲れて居た。然し、心が何となく晴々しく明るく愉快だつた。少しも、その働らいた事に不快や後悔は感ぜられなかつた。而して料理屋から迎ひに來た時彼女はいそ〱と出て行つた。出會つた仲間に彼女は云つた。

「ほんとうにBさんは偉い方ね。今日私の處へ來て、一日働いて下すつたんですよ。たつた私が一枚着物を上げた御禮に。私は氣の毒で見て居られませんでしたわ」

一體その女は前から、自分の生活にあき、生活を呪ひ生活を悲んで居た。彼女は、時々この暗い世の中から、逃げ出さうとさへ思つて居た。處がその日から、自分の生活にも光があり、慰めもあり、喜びもある事が、わかつた様に思はれた。間もなくその女は町で「變りものゝ藝者」として評判になつた。

Bはその晩歸つて、Aに女の處に行つた事を話した。Aはじつとそれを聞いて居たが、暫らくして言つた。

「あまり近寄らない方がいゝでせう。淸い心さへもつて居たら關はない事ですが、私達は凡夫です。罪の恐ろしささへ、やつと知りかけた人間です。ひよつとして『迷』や『慾』の幻影に誘はれないとも限られません。私は今まで女といふ幻影に惱まされた事はありません。然し私は、あなたを知つて、是も亦恐るべき罪であり、敵である事を知りました。「愼んで女色を視ること勿れ。」「亦共に言語る莫れ。」といつた佛の心は窺はれます。私達はまだ、女に對して、一個の淸淨な佛道場を考へるには早や過ぎる様に思ひます」

BはAの余りに消極的な考へに幾分か不滿であつた、彼は又翌日も、あの女の家で働きたく思つた。然し翌日はAと一緒に他の家で働くことにした。暫くの間AとBとは一緒に歩いた。その中にBも女の家に行く事を忘れて居た。

Bに對する町の噂さは、Aと共に悪いことはなかつた。何れも敬愛な佛の爲めの托鉢者として彼等に對した。Bの親達はそれを喜んだ。それを聞いて、Aも嬉れしく思つた。Bの父親は、その御禮に何か供養したいと言つた。Aは別に是と言つて望みはなかつたけれども、一つの家が欲しい様な氣がすると言つた。それは、Aの居るその家の持主が、無賃でいつまでも置く事は出來ないし、又そこを拂つて、畠にするからと言ふ事を前からAに言つて來て居たからであつた。それを聞いてBの父親は田圃の中の、そのがらんとした、寺を思はせる様な家をAに供養したのであつた。この家はB家で持つて居た古い家だつた。然し町へ不便な爲めに暫く空いて居たのであつた。Aは喜んだ。「御恩は忘れません」AはBの父親に言つた「この家は私達の心の家としませう。私達の心はこの家に常に住ひ、この家に常に休み、この家で淸くされ、この家で佛の光に浴する様にしたいと思ひます。」

然しそれはこの家にのみ固着して居ると言ふわけではあり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ません。私達の心はこの家の外に働くのです。この家に際ふ私達の心が溢れ出て、世の人の心にしみ込む事を願ひたいのです。私達は、私達を動かす力が世のあらゆる人を動かす力である事を願ひ、又信じて居ります。私達は努めて、佛の光の滿ち滿ちた家を作りたいと思つて居ります。幸ひ、この間Yさんの家に托鉢に行つて、あの傍の河で洗濯をさせて貰つた時に、流れて來たのを拾つた木の佛像がありますから、それを佛壇に供へて、この家の本尊としたいと思ひます。經文や、その外の本も方々から供養され喜捨されましたから、それをこの家の藏書としませう。本氣に佛の事を考へ、佛を信ずる事の出來る場所を與へられた事を嬉しく思ひます。この家は私達の家と同時に佛の家です。宿を借りたい人には誰れにも貸しませう。或は不正の人が僞つて、宿を借りに來るかもしれませんが、それも何かの因緣となりませう。世の罪を背負つて苦しむ人々の安息所として、この家が幾らかでも役立てば幸ひです。私達もかういふ人達が幾らでもその重荷をへらして行ける樣にいそしみませう。私達はさう云ふ人々の爲めに佛にならねばなりませぬ」

十日許り後には、その家でAとBとの生活が始まつて居た。

六

それから又一年經つた。春の事だつた。AとBとの群にCが加はる樣になつた。Cは中學の五年生であつて、その年の三月に卒業する筈であつたのが、落第の憂目を見たのであつた。彼は、極く小さな時から、文學書を讀んだり、何か書いたりする事を覺えて居た。其の爲めか、數學や理化の成績が思はしくなかつた。それで何度となく教師からも注意を受け、學年末の度に及落を心配したりした。或時は、教師が「文學をまだやらうとするなら、今度は落第させてしまふから」と言つた。然し、彼は平氣で居た。彼は自分が文學より外には何も望む事が出來ないと言ふ事、また他のものに頭を向けても氣が入らず、從つてよい成績を取り得ないといふ事を知つて居た。

「私に文學をやめろと言ふのは私を殺すのも同樣です」

彼は其時に言つた。而して相變らず其後も、文學書を讀み何か書いて居た。友達同志で廻覧雜誌を作つて見たりした事もあつた。幾何の本も代數の本も投げ出されて、顧みられる事はなかつた。彼には中學が退屈でならなかつた。其處には無味な課目とそれを無味に喋る傀儡の樣な教師だけが居る樣に感ぜられた。何物も生き〳〵としては居なかつた。彼はもつと生き生きした。彼の心に何物かを吹込む樣なものを勉强したかつた。さう言ふものは矢張り彼の嗜好である文學の外にはない樣に思はれた。而して眞一文字に其れに沒頭した。その爲めに終に五年の卒業の時に落第させられてしまつた。まさかと思つた彼の見くびりは、この慘めな現實の前に叩きつぶされてしまつたのであつた。彼の兩親は怒つた。其時彼は落第したものは仕方がないと言つて、兩親と言ひ爭つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

然し又に兩親が彼を哀んでやさしい言葉をかけた時は、彼はすまない事をしたと思つて、心に侘びた。眼にも涙が浮んだ。不愉快な押しつけられた樣な空氣は幾日も續いた。小さな時から一種の功名心の深かつた彼には、再び、元の學校で落第生の汚名のもとに同じ學問を繰返す事は何うしても忍ばれなかつた。兩親もその彼の心持はよく察する事が出來た。その爲めに、強ひて學校に行く樣には言はなかつた。兩親とも「もうやりたい事をさせるさ」と言ふ諦めを持つて居るらしかつた。同級生のものが上の學校の試驗を受けて、その準準備に忙しい時、彼は何處にも外へ出る事なく家に許り引込んで居た。彼の心は日に〳〵ふさぎ込んで行く許りだつた。彼は町の人に顏を合はすのも、面目ない樣な氣がした。

（一生の日蔭者になつてしまつた）

彼は心につく〴〵さう思つた。これから先き彼が評價される時は常に、この一汚點が引出される事を思ふと彼は悲しく又淋しくなつた。こんな事で埋められ葬り去られる人間がつまらなく思はれてならなかつた。彼は彼の行先きの長さを思つた。その間常に暗い蔭を負つて歩かなければならない自分を思つた。例へ立身しても、この汚れによつて、その價は二割も三割も値引される事を思つた。もう生きがひのない生きた死骸であると自分を思つた。終に彼には生きて行く事が無意味の樣にさへ考へられて來た。彼は時々、囚人の事を思つた。譬へ牢獄から出ても、彼には前科者といふ恐ろしい肩書がつく、世の人はもう相手にして呉れない。善心を以て何れ程忠實に働かうとも、立派に出世しようとも、彼よりもつと卑しい心の悪い人々からも、その人々が牢に入らないと言ふ强身だけで、彼は罵られ嘲けられる。而して、彼の一生は、暗い死よりもつらい苦痛の中に埋れるのである。その場合、その人は生きて居ても仕方がない。――その前科者の運命が自分の運命と同じだとCは思つた。

（自分も前科者だ。生きて居ても仕方がない。一度牢に入つた人が世に出ても、誰れも相手にはしないと同樣に、この落第によつて人々は蔑むだらう。譬へ此の汚名を濯ぐ爲めに奮鬪しようとも――自分は藝術に向つて進むより他にはないが――人々は生意氣と嘲けるであらう。已を知らぬ莫迦者と罵るであらう。あんな何も出來ない者に何が出來るものかと、冷笑するだらう。然し其等の冷笑や嘲罵を乘切つて、最後に人々に眞の自分の力を知らせるだけの自信は何うしても自分には持てない。それは、自分の意氣地なしで、又意志の弱い怠け者である證據であるかもしれない。然し自分にはどうしてもこれだけの自信は持てない。自分は弱虫なのだ。自分で自分を救濟出來ない弱い人間なのだ。生き甲斐ない人間なのだ）

然し彼は死なうとは考へなかつた。彼は死なうと考へるのも恐ろしいと思ふ程な弱い男だつた。而して彼はこの見捨てられた樣な人間も、何物かにすがる事によつて、救はれるのではあるまいかと思つた程依賴心が强かつた。彼は寄りか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

るべき何物かが欲しかつた。淋しい彼を拾ひ上げて溫い懷に抱いて呉れる何物かが欲しかつた。光が欲しかつた。

かうして彼が親から離れて、AやBの群の中に入つて來たのはそれから間もない事であつた。

「この見捨てられた人間を救つて下さるのは、あなた方より外にない事を信じて參りました」

「救ふのは私達ではありません。佛です。私達には救ふ力も方便もありません。佛への奉仕、道への奉仕、人々への奉仕――その奉仕の心であなたが働いて居られゝば、あなたは救はれるでせう。私達も亦救を得ようと努めて居る托鉢者です。あなたの同行者です」

とAは云つた。

Aは又も運命の重荷を背負つて、彼の許に憩ふ人のあつた事を喜ばしく思つた。翌日から町には、AとBとCとの三人の姿が現はれた。

Aは或る時Cの藝術に志すのを聞いて云つた。

「然し私には藝術は第二義的のものゝ樣に考へられます。而して第一義的のものは卽ち生活そのものゝ樣な氣がします。よくは知りませんが、トルストイは、藝術家として大成した後にも生きる事について大きな煩悶や懊惱を持つて居ました。而して、死病と知ると、後世をあやまるを恐れて、終に出家して田舍の一寒驛に身を終へました。このト翁の生活こそ、その證據とも云つて好いでせう。藝術許りではありません、知識でも、事業でも、矢張り第二義的のものです。それならその第一義たる生活は？と云ふ事になります。それは、自己の罪を知つて、沒我自由の生活に入り、懺悔奉仕に身をつくすこそ眞の生活です。これはわかりきつた事で居て人がわからずに居る事です。これに氣づかせられた私達はほんとに佛天の加護と云ひますか、又攝理の妙力といひますか――心から感謝し、惠まれた自分を幸福に思はなくてはならないのです。眞の生活の上に建たない藝術や、知識や、事業は、土臺のない建築物も同じです。人々の多くは、この土臺のない建築を完成しようとしてあせつて居るのです。その爲めに不自然な事をしたり、破壞しようとしたり、互に盜み合つたり、嘘のつきつこをしたり、羨んだり嫉んだり、自慢をしたり、嘲笑をしたりして居るのです。而してそれが根本を忘れた好い加減の胡魔化しである事を知らないのです。私達は其れを以て世の人々を笑ふのではありません。かゝる人々に私達の生活を知らせたいのです。それによつて、世の人々が、眞の生活を知り、成程これによつて、總てのものが產み出されなくてはならないと云ふ事を知つて呉れゝば、それで既に私達の奉仕の目的の一つは達せられたわけです。然し私達はそれを麗々しく見せ付けてはなりません。見せつける事は虛僞です。私達がわざ〳〵見せ付けずとも、佛は、人々にこの心持をお傳へになるでせう。私達は云つてはいけません。自分で書かずとも人か書かずには居ないでせう。云ふ事も書く事も

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

い〻加減の胡魔化しでやれる事が多くあります。行こそ眞ものです」

　これを聞いて、Cの文學に對する態度は變つて來た。彼は今まで尊び愛して居た、藝術至上主義の作品を嫌ふ樣になつた。而して人生の爲めの藝術に頭を向けて行つた。

　Cは、自分の弱さや、Bの弱さやAの弱さを知つた。而して、弱者許りがか〻る眞の生活に目覺めるのであらうかと思つた。彼はAに云つた。

「なぜ、斯う云ふ道へ進まうとする人々は弱い人達なのでせう。Bさんと云ひ、私と云ひ」

　Aはそれに答へた。

「弱いのはBさんやあなた許りではありません。私も弱い人間です。又他のあらゆる人達も全て弱い者です。然しその弱い人類の中にあつて、眞の生活を見出し、それに從つて行ける私達は弱い者の中の強者です。さう云ふ感じが確かにするでせう。私達にも常に「後戻り」があります。「迷」や「罪」の幻影に脅かされる事があります。其の時には自分の弱さの現れたのを感じます。而して、その度に神とか佛とかの強さを益々認めます。世の人々は弱いが故に互に助け合はなくてはならないのです。然し世の人々は徒らに自分を僞つて強さうに見せかけたり、吾々は強くなくてはならないと絶叫したりして居るのです。矢張りこれも僞りや、上面な噓言です。私達は自分の弱さを知つて初めて「強い」と云ふ事がわかつて

來るのです。その意味で、私達は自分の弱さを知り得ただけ強いと云へるのです。自分の弱さを知るのこそ完成への正しい道の出發點です」

　Cは續けて聞いた。

「人間と云ふものは、何かその人の精神生活に大きな打擊がなくては、かう云ふ道に入る事は出來ないものでせうか」

「さうです。大きな打擊は、その人に自己の弱さを眞に知らせて呉れます。又自身の罪とか惡とかを、眞に見せて呉れます。その爲めに、その人は、何物かに賴らうとします。又自分の罪を何ものかに懺悔したくなり、自分の惡が怖ろしくなります。この思ひが愈深刻になり眞劍になつて行くと其處に神が現はれ佛が拜まれます。而して、懺悔奉仕の生活が始められるのです」

　Cは、AやBの群に入つたもの〻、常に落付がなく、或る不安が彼を苦しめた。或る時は、その淸淡な平調な生活に倦怠を催した。而して、我儘な心は彼を兩親の許へ歸らせ樣とした。彼はまだ佛の光を充分感ずる事が出來なかつた。Aはそれをよく知つて居た。然し、口には出さなかつた。「時」はCにも福音を持ち來たす事であらうと考へて居た。Aは自分に人を咎めるだけの値も、用意もない癖に、や〻もすると人を咎め樣とする自分の心を振り返つて悲んだ。早くこんな心をなくしたいと思つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

Ｃが彼等の群に加はつてから、一年が經つた。三人は毎日三方面に向つて托鉢に出た。平和な日と生活が續いて居た。然し内面に於て、三人は三樣の苦惱と常に戰つて居た。

Ａは益々罪惡の恐ろしさが身に迫るのを感じた。些細の惡も彼れには廣大に思はれて恐ろしかつた。その癖惡に向つての誘惑は常に彼を襲つて來た。彼はそれと勇敢に戰つた。そこに苦痛があつた。然しその誘惑にまけて惡を犯して了つた時の彼の心の惱みは更に〳〵大きなものだつた。彼は佛の前に身をひれ伏しても尚ほその罪を謝するには足らなく思つた。さうした時彼は、一日中佛壇の前で讀經して居た。誰れが話しかけても見向きもしなかつた。彼の聲は低く力が籠つて居た。眼には佛の大慈悲にすがる涙が湛え、身體は罪の怖ろしさに震へて居た。

又彼は、折にふれ「母」の事を思ひ出した。彼は、自分のもつとよくなつた時、母が彼を産んだ事を喜び、彼を育てた事に誇りを感じ得た時、而して母に安心と滿足が見えた時、其時に、母を死なせたかつた事を思つた。けれども事實彼が邪道にある時母を心配の内に死なせてしまつた事を思ふと、たまらなかつた。而して母の死によつて自分には新らしい光が見出され、眞の生活についての決心が定まつた事を顧みては彼は母に感謝し心をこめて合掌した。

Ｂも常に「迷」と「慾」と幻影に惱まされて居た。彼は、女に對して靜かな心で居られない自分を振り返へると、自分の淺

ましさを感じないわけにはゆかなかつた

しくなつた。彼の口には、

佛言。愼勿視女色。亦莫共言語。若與語者。正心思念。我爲沙門。處於濁世。當如蓮華不爲泥汚。想莫老者如者。長者如姉。少者如妹。稚者如子。生度脫心。息滅惡心。

と誦して居た。然し時にはＳ子の事が思ひ出されたりした。Ｓ子の幻影は、忘れる事の出來ない眼や鼻や口や髮の毛を持つて、彼の前に現はれた。而して、見えない力で彼を引寄せ彼を惱ました。さうした時道で出會ふ女が悉くＳ子であつたりした。彼は心の亂れ、落付かなさを覺えた。彼は（思ひ切つて）と思つて、白粉を塗つた女達の居る家の方へ步いて行かうとする時があつた。その時の、心の爭鬪は彼にはち切れさうな胸苦しさを覺えさせた。一方に、佛や、善の強い權威の反抗があるに係らず、他の一方に惡魔の甘い誘惑が彼をとろかさうとして居るのであつた。然し幸に佛の力がいつも勝つた。その爭鬪の後の寂しさに、溫かい光は彼の心にさし込んで來るのだつた。佛壇の前の讀經の聲は一段とほがらかに響くのであつた。

Ｃは又、常に佛や神がわからないといふ不滿と不安の心に惱んで居た。彼は或る時Ａに聞いた。

「一體佛は何處にあるのでせうか。」

Ａは云つた。

「何處にもありませんよ。皆銘々の内にあるのです。而して世

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

の人はその佛に氣づかずに居るのです。或る人が春を諸方に訪ねて歩いたが何處にもない。而して自分の家に歸つて來て、その軒端に咲いた梅を見て、ああ此處に春があつたと云つたと云ふ話がありますが、それと同じ事です。何處に佛があるかと探し求めて居る內は迷です。自分に歸つて自分を見た時初めて佛を見出す事が出來るのです。これを考へて見ても、矢張り人間は寂しいものです。自分の寂しみに徹した時に初めて佛がうかがはれるのです。私の今までの生活が是を物語つて居ます」

然しCにはよく分らなかつた。唯人間は寂しいものだと云ふ事だけは考へられた。彼はそれから努めて自己に佛を見出さうとした。

是等三人の三樣の苦痛はあつたけれど、それは皆彼等の眞の生活に向つての精進の過程に必要な試練や敎へであつた。此等の爲めに、彼等は、なほ平和に惠まれて生活が出來た。彼等は托鉢を一日も休む日はなかつた。每日、夜になると中學の生徒が彼等の許へ英語を習ひに來た。彼等は叮嚀に敎へた。生徒達の親は彼等に感謝した。Bは云つた。

「いゝえ、勉强のお相手をさせて頂いて、有難く思つて居ります」

町の人々は彼等三人を尊んだ。然し三人は、尊まれゝば尊まれる程益々謙遜になつて行つた。米や其他の食物や着物の供養は常にあつた。彼等は有り難いと思つた。彼等は一[illegible]

こめて佛に感謝し、沒我奉仕の托鉢に精進した。

三人が共同の生活を始めてから、三度目の秋が靜かに過ぎて、暗い野面を吹く風の冬も、漸次に暮れて行つた。而して春がやつて來た。黑い土は水氣をふくんでふはりとふくらんで居た。空は高く美しく晴れて、打續く涯てない大地を軟かにくるんで居た。永遠の惠ましい太陽の光は、したゝる樣な潤ひを含んで、黑い土の上に注いで居た。木々の枝には若々しい萌え出る若葉の燃ゆる樣な水々しい力が溢れて居た。森羅萬象、すべてが春の榮光の中に包まれて、生命のいき〱しさを表はして居た。

丁度其時であつた。Aは或る處で、S子が又町に舞ひ戾つて來て藝者になつたと云ふことを耳にした。Aは夫れを、何か怖ろしい物が自分達の方へ向つて來た樣に感じた。

AはBに、この事が知れなければいゝと思つた。知れる事を怖れて居た。出來る丈け氣をつけようと思つた。然しBはAが知る前にその事を知つて居た。Bは彼に襲つて來た恐ろしい惡魔を見た。彼は初め、この惡魔から逃げようとした。なるだけ女達の居る町の方へは行かない樣にした。彼は道に出會ふ女を見ても恐ろしい樣な氣がした。それがS子でなくてよかつたと思つた。然しBは自分の心に、常にS子に引かれる力がある事、何となく一度會つて見たいと思ふ心持のある事を感じないわけにゆかなかつた。けれども、抑付け[illegible]

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

の心が增加されて彼を苦しめた。彼は、何うしても彼を暗い谷間に再び落し入れ樣とするこの力に打勝たなくてはならないと思つた。彼の日々の讀經は長く又いつもよりも力が籠もつて居た。彼は心に佛を祈つた。

（どうか救つて下さい。この「幻影」から、私を助けて下さい。私には彼女に對する愛も、未練もないのです。憎みさへ私の心には感ぜられるのです。それなのに何ものかの力は私を彼の女の方へ引摺つて行くのです。その力から、私を保たして下さい。私は、この力に抵抗が出來さうにないのです。弱きが故におすがりします）

彼は一所懸命に、惡魔から逃げてみた。然しこれは、臆病から出た一時逃れに過ぎなかつた。惡魔が彼の存在に氣付かずに居た間は、彼も追ひかけられる樣な事はなかつた。けれども今や惡魔は二倍も三倍も早い足並で彼を追ひかけ出した。

Bの處へ或る月の夜、若い女が訪ねて來た。其の時三人は一所に机を集めて、銘々書いたり讀んだりして居た。その女にはAが會つた。

「こちらにBさんが居らつしやいますか」

女は暗い入口に佇んだまゝ叮嚀に云つた。

「Bさんは居ます。何か御用ですか。何方からです」

Aは心に何かの惡い前兆を直觀した。

「一寸お目にかゝり度いのですが。私は使のものですけれど………」

女は尙ほ叮嚀に、俯向き乍ら小聲で云つた。

「あゝさうですか……」

Aは坐敷に歸つて、Bに此事を話した。Bは立つて入口に行つた。女との低い話聲が少しの間續いた。その中に漸次Bの荒らく〳〵しい聲が聞こえて來た。Aは立つて入口に行つた。

「何うしたのですか」

AがBに聲を掛けても、Bには聞こえないらしかつた。Bは激昂して居るらしく、困うじた樣に立つて居る女に震へた聲をあびせて居た。

「早く歸つて下さい。こんなものも持つて歸つて下さい。何も、用はないのですから……」

Aはもう一度Bに云つた。

「どうしたのですか。何をさう激して居るのです」

Bはやつと Aの來たのに氣がついたらしく、振返るといきなりその手にすがつて、涙をすゝり出した。

Aにはよくわからなかつた。然し、茫然と立つて居る女を見て、氣の毒になつて云つた。

「なんだか存じませんがBさんが大變激して居る樣ですから明日の事にして、頂きたう存じます。今夜は失禮ですが、お歸り下さい。よく後で話を聞いて、何とかいたしますから」

女はさも困つた樣に暫くもぢ〳〵して居た後、叮嚀に挨拶をして歸つて行つた。その後でAはBを連れて坐敷に歸つた。

「一體なんです」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

Aは聞いた。Bは、まだ涙を流して居た。而して時々せつなさうにしやくり上げて居た。それでも小聲で云つた。

「一緒に祈つて下さい。佛様に、私の弱さを救つて下さる様祈つて下さい」

「私達はよろこんで常に佛様に祈つて居ります。お慈悲深い佛様に祈つて居ります。然し、何ぜそんなに亢奮して居るのですか」

Aは云つた。Bは一二度口をもぐ／＼と動かしてから、

「悪魔がいよ／＼挑戰して來たのです。私に向つて戰の火蓋を切つたのです。――あの女は、あのS子の使ひなのです。而してS子の手紙を頼まれて來たのです。あの手紙には何が書いあるか知りませんが、あの使の女の口振りでは、今夜にでも或る處へ來て呉れる様にと云ふのです。誘惑はいよ／＼私に、ほんとの形を以て迫つて來ました。

あの女が又この町へ歸つて來たと聞いた時、早くも私は彼女の誘惑の當然私の許へ注がれるのを知つて居ました。私はそれを恐れました。けれども一方或る見えない力が私を彼女の方へ引張るのです。今日もあの使の女が來た時、あんなに怒鳴らないでは居られない程、私の心はS子の方へ傾きました。それではならないと私は、その心を押へ様として怒鳴つたのです。是れからが戰です。どうか共に祈つて下さい。」

AはBが眼のあたりで、悪魔との惨めな爭鬪に苦しんで居る様を見て、哀れに思つた。Aは慰める様に云つた。

「祈ります。私もCさんも共に、祈ります。悪魔から遠ざかつて居る中は私達の力が信ぜられます。然し、悪魔と面と向つて戰ふとなれば、私達の力は見えなくなります。信ぜられなくなります。唯、佛の廣大な力にすがるより外に仕方がなくなります。祈るより外になくなります。考へれば我儘な自分達です。然し、祈りは實行の――言ひ換えれば悪魔との抗戰の――最も強いものです。私達の中で最も淨いものは祈りです。今夜は三人で祈りませう。佛におすがり致しませう」

その夜、AとCとは、悶え疲れて居るBを、軟かな心に包んで、佛壇の前に祈禱を續けた。電燈を消した眞暗な部屋には、佛壇の灯が夢の様にまたゝいて居た。其前に並ぶ三つの影は時に靜かに搖れて居た。淀んだ様に靜まつた黒い空氣の中を三人の靜かに小聲で經文を誦する呟きが、或る尊さと物凄さを以て流れて居た。その聲は曉の明るさが雨戸の隙から洩れる頃まで、同じ様に續いて居た。日が昇つてからAとCはいつもの様に出て行つた。後には、Bの身じろきもしない姿が、佛壇の前にあつた。目は閉ぢ合掌のまゝ口には讀經が續いて居た。家の內は、全く靜かだつた。默つて緣側に射込んで居る春の日脚は、悠々と移つて居た。緣先きの銀杏に雀の鳴き聲が時々聞えた。

八

Bは弱かつた。悪魔に對するあらゆる防禦も、抗戰も、無駄であつた。彼は悪魔に敗けた。而して悪魔に捕へられた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

彼は、もう何うにも出來なかつた。心には佛の光が消えて了つた。其の代りに彼の心には、S子の、眼が澄み、眉毛が澄み、唇が澄み、しつとりとした黒髪が澄み、彼女の彈力のある肉體が澄んだ。磁石に引かれる鐵片の樣に彼はS子に引かれて行つた。AやCの眼を盜んでS子に會ひに行く日が續いて居た。Bには、女が、こんどこそはほんとに、眞の愛や、同情を以て自分に傾いてゐるのが感ぜられた。S子が泣く時Bも共に泣いた。心も、身體も、と投げ出して來る彼女を、Bは如何なる犧牲のもとにも愛さなければならないと思つた。彼れは、自分の生活の事なぞは考へなかつた。何の氣兼もなく騷ぎ廻つた。昔の遊蕩兒の生活が彼には懷かしく又慕はしくなつた。彼には、この生活こそ、自分にとつて最も自然であり充實したものゝ樣に思はれた。時に、家に歸らない事が屢々あつた。Aは是れを見て悲んだ。Cは是を見て怒つた。

Cは或る日Aに云つた。

「私は、或る人がある夜、あの女の家の裏をうろ〱して居たBさんを見たと云つたのを聞きました。其時Bさんは取亂した淺ましい姿をして居たさうです。あの女の家でも、無錢でかくれ遊びをする奴だと云つて大變怒つて居るさうです。町では大變な評判です。Aさん！ そのまゝにして居たら私達の生活までも破壞されやしないでせうか。又破壞されなくとも、人々から誤解される樣な事はありますまいか。もう、此處から飛出すより外に仕方がありますまい」

然し、Aは云つた。

「それはあまり言葉が非道過ぎます。私達はBさんをせめる事は出來ない。人をせめることは罪です。私達には、ゆるすより外に力がありません。それ以上は佛の力です。Bさんもいつか又佛の光に浴する時もありませう。それに、私達はよく女の方も知りません。もしも女が眞の愛を以て、Bさんに對して居る時、それを離す事はよくないと思ひます。私達は、あの女をも佛緣とやらに引かれる樣にしてやらなくてはならない。それを祈らなくてはならない。私達は、二人の運命を祈るより外に仕方はありません。こんな結果になつたのも皆、云はば、私達がわるいからです。物事はよく考へれば總て自分が惡いのです。三界に罪人あるは、悉く自分の責めであると云つた聖者もあります」

「然し、あの樣を見て、ゆるして居るのは苦しい事ではありませんか」

Cはさも心外らしく云つた。然しAは慰める樣に

「Bさんには歸つて來たら、私から夫となく話して見ませう。亂れた心も落付く樣に、佛樣にも祈る樣に話して見ませう」

と云つた。

その夜Bは歸つて來た 落付かない擧動は放心した人の樣に見えた。夕飯も喰べずに、机に寄りかゝつたまゝ、默つて、前の壁を見つめて居た。眼は引釣つて、口の廻りには硬ばつた筋肉がぴり〱と動いて居た。然し、その眼は力がなく、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

どんよりと潤んで居た。その顔には半月許りの間にやつれが見えて居た。

傍へ來て、Aは靜かに云つた。

「なぜさういら〳〵して居るんですか」

その聲にBはじつと、Aを見つめた。AもBの顔を見つめた。恐ろしい様な沈默があつた。あらゆる感激と亢奮の頂點に達した様にBの眼は一時無表情になつた、と、いきなり、Bの眼からは涙が流れ出た。Bは肩でせつなさうに鼻をすゝつた。而して、ぽつりぽつりと話し出した。

「一體私は何うした人間なのでせう。確かに呪はれた人間です……私が話さずともあなたは、近頃の私を知つて居るでせう。私は、既に生活も、佛も、念頭にはなくなつて居たのです。私にはあの女あるのみだつたのです。處が又も私は佛を慕はないでゐられなくなつたのです。私は又も、自分の淺ましい人間である事、又生活の滅茶々々である事に氣が付いたのです。私はもう何うしていゝかわからない様な、罪の重荷に苦しんで居ます。我儘な、常に動揺して居る自分を見る時、とても赦されない、救はれない自分を知るのです。私はあなたの反逆者です。惑亂者です。どうか私を責めて下さい。罰して下さい……」

もう口が利けない様に、Bはわく〳〵と口を無理に動かして居た。眼が釣上つて、顔色が眞蒼であつた。AはBの肩に手を置いて、じつとBの顔をのぞき込んで居た。CもBの様子に眼を離さなかつた。

「佛様は赦して下さいませう。……一度は亂れても再び元に還つたあなたの心を佛さまは、喜んで居られませう。……まあ落付きなさい」

Aは肩の手を下して、Bの手を執り乍ら云つた。

「……それがです。再び佛様の光にすがり度く思ひつゝも、濁つた、然し絢爛な誘惑の甘酒は、私を引付けてやまないのです。而してそれに私は打勝てないのです……」

Bが續けて云はうとするのをCが遮つた。

「それでは、あなたは佛を瀆すのです。あなたの菩提心は〝えせだ。あなたはあなたの汚れた誘惑から覺めたのではなく依然として、誘惑に從ひつゝ、時々あなたを苦しめる罪の恐ろしさを慰め様として、又紛らさうとして、佛様の名をかり様とするのです。あなたが、女との耽溺から離れて、佛の光りを欲して來たのも、歡樂に倦怠を覺えたからでせう」

Bは、さも耐へられない様に聞いて居たが、

「Cさん、あなたには私の苦しさがわからないのです。又、私の話も半分しか聞かないで居るのです」と、少し激して云つた。

「あの女は、私の爲めに商賣さへ出來なくなつて了つたのです。それは、一體U市の方へ行く時からあの女は標判が惡かつたのですから、歸つて來ても、少しも人氣が立たないのです。而して、而かも、私の弱さの爲めに私があの女の處に引きずられて行くのを、世間では彼女の罪にするのです。で、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

彼の女の評判は益々悪い許りです。その爲めに、彼女を呼ぶお客は一人もなくなつて居るのです。それを知つた時、私は自分の罪の恐ろしさに氣がついたのです。私には佛が現れたのです。何うにかしてこの女を救ひたい。而して、佛に對する罪の萬分の一なりともおわびしたいと思つたのです。それで私はその方法を考へたのです……」

Ｃは又遮つた。

「然しあなたは、その女のあなたに對する愛をほんとのものと思つて居るのですか」

「それは別問題ではありませんか。Ｓ子の愛がほんものであらうともなからうとも、彼女の不幸は私故です。もし、私が初めから居なかつたら、Ｓ子はこんな不幸にならなかつたかもしれません。それ故に私は、私の罪で醸し出された不幸からあの女を救はうと思つたのです」

「それはあまりにお人好しだ」

Ｃは吐き出す樣に云つた。Ｂは續けた。

「お人好しでも、是れが正しい路だと思ひます。……で私はその方法として、彼女と結婚するか、自分の存在を無くするか、二つを考へたのです。私は、先づ彼の女と結婚しようかと思つたのです。然し、私には私が彼女と結婚する事によつて、彼の女が幸福になるとは、何うしても思へないのです。私はその爲めに、多くのものと戰ひ、多くのものを呪ひ、多くのものを不幸にしなくてはならないのを知つて居ます。さうやつて生れた結婚は幸福なものでない事、或は彼女を今の狀態よりも更に不幸にするかもしれないといふ事を知つて居ます。ですからこれは許されない事です。そこで私は第二の方を採らうとしたのです。私は彼女から自分を遠ざけ、彼女と私との間を世間から忘れさせ樣としたのです。これが二人の運命を傷つけない最上のやり方だと思つたのです。而して四五日前から私は彼女に近付く事をやめました。處が駄目です淺ましい私です。彼女の姿は私から離れません。到頭私は今日又彼女と會つて了つたのです。その恐ろしさ、悲しさ、もう私は死にたい位です。あゝさうです。死です。死んで終へばいゝのです。私には今死がある許りです。今彼女に會つたのを暇乞にして、死にたい。Ａさん。私に死なせて下さい。佛にそむき、罪の恐ろしさを知らない人間は死んで了つた方がいゝのです……」

ＢはＡの手をしつかりと握り返し乍ら云つた。聲も手も身體もぶる／＼と震へて居た。又一時、抑え付けた樣な沈默が續いた。夜は餘程更けて居るらしかつた。と、Ａは靜かに云つた。

「あなたの心はわかります。佛樣はお赦しになりませう。あなたの心の悶えは人間のほんとの悶えです。これも眞實です。罪を罪と知り、惡を惡と知る人をこそ佛は喜ばれるでせう。あなたは死ぬと云ふ、死なせて呉れと云ふ。然し、それだけの罪が何處にありますか。又死でなくては償はれないものが何處にありますか。私も、あなたと同樣、あなたが其女から離れた事によつて、その女が浮び上らせ、又二人の運命

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

を傷けない様にする事を望みます。今のあなた方の戀は、私にはほんとと思はれないのです。それは、ほんとの戀は、それによつて互に幸福にならなくてはならないものゝ様に思はれます。互に相手の運命を傷つけ、相手を不幸にして居る戀は罪悪です。私はあなたが其女から離れる事を望みます。而して、それがあなたに其女を隣人として愛し且憐れむ事の出來る聖なる戀を持來たす事と信じます。この事の不可能なためにあなたは死を願ひますが、私は不賛成です。それ程無價値な死は何處にもありますまい。私はあなたが、この土地を去るのが此際一番よいと思ひます。托鉢の生活はこの町に限つた事ではありません。この世界の何處にも佛がいますと同しく、私達の懺悔奉仕の生活は何處にも營なまれ、又營なまれなくてはならないわけです。この土地に居れば、女の誘惑はあなたを常に襲ひます。それが人間です。互に傷付け合ひ乍らも、慕はずに居られないのが人間の戀です。この土地を離れゝば、又あなたの心も靜まりませう。佛のお赦しや、お助けも、身にしみ〴〵と感ぜられる様になりませう。而して、心をつくして祈る様になるでせう。私はあなたに、今の苦しみや、悲しさやせつなさを殘らず、佛様にお委せして、この土地を出立される事を望みます…？佛様はあなたをよいやうにお導き下さいませう。而して後で私やCさんは一緒になつて、あなたとS子さんの二人の愛のかはらない様に、聖い愛に澄む様に、佛様においのり致しませう」

Bは頭を下げて、じつと聞いて居た。肩が、呼吸の度に大きく波打つて居た。Aは心に祈つた。

（佛さま、この弱き男をお赦し下さい。二人の愛のかはりませんやうに）

死の様な靜寂があたりを支配して居た。

小さな風呂敷包の荷物を持つたBの後姿が、長い街道をどこまでもどこまでも辿つて行つた。東の空は金色に輝いて東の山の頂きの線は、淡紫の靄の中にゆら〳〵と燃えて居た。朝の冷や風が野面を渡つて街道を横切つて行つた。野は靄がこめて、蒼黒い麥の畑がつゞいて居た。ほの白い農家の壁が、まだ明け切らない曉の淡闇に浮いて處々に見えた。路は白く長く續いて居た。

その中に太陽は山頂から浮び上つた。眞赤に灼燃した日輪は、數萬億の光芒を振り飛ばし乍ら、ぐる〳〵と廻つて紺青の大空に舞上つて行つた。それと同時に地上のあらゆるものには、金色の輝きが降り注がれ、總てのものは生のしたゝりを受けて、一度に悉く活潑に、その生の營みを初めた。

Bは今し、昇つて行く太陽を振り仰いで立止まつた。彼にも亦したゝる許りの生々した光が感ぜられた。

新らしい光！

彼の心は輝く光で充ち滿ちた。

彼は太陽に向つて合掌した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

加藤一夫著

幻滅の彼方へ

著作集第四編
定價金壹圓八拾錢
送料金拾錢

これ前半を雑誌「中外」の復活號に掲げて世評を高うせるもの、新たに後半を書き加へて一巻とす。文壇意識に終始せる大小の作家、悉く疲弊せる時、此の雄篇を公けにして汎く眞價を問はんとするは、著者に充分の自信あればなり。信仰と戀に迷ふ一少女の魂の記録にして著者が抱大なる人道的精神全巻に滂溥す。

上野松峯著

漂泊の西行人

五版
定價金壹圓五拾錢
送料拾錢

これ戀の人、煩惱の人、詩歌の人にしてかねて寂靜の哲人たる西行法師が壯年胸裏に惱みの萌し初めし頃より、遂に晩年一杖、一鉢身を行雲流水に托するに到りし心的發達を詳描細叙す。これ体を小説に假れる歴史と云ふも可想を歴史に托せる小説と云ふも可、然れども構想の關係より史實を縦に改めたる所謂歴史小説には非る也。

宮島新三郎著

近代文明の先駆者

再版
定價金壹圓七拾錢
送料金拾錢

精緻の鑑賞、温雅の見識を以て、新早稲田の代表的批評家と稱せらるる宮島氏の處女論文集也。二十世紀の兩預言者として並稱さるるカアペンタア、トルストイを初め英獨佛露米の代表的文豪を論評し、その間自ら文明思潮の流動、推移を了察せしむ。これ晦澁の飜譯に非ず、乾燥の講話に非ず、自家獨自の研究を平明流暢に記述せし絶好の文藝入門書也。

發行所　東京市神田區表神保町一〇　春秋社　振替東京二四八六一　電話神田二一三八

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

木村毅譯

アミエルの日記

上卷出來
定價金貳圓
送料金拾四錢

全譯・新刊

トルストイは本書を一讀するや感激の餘り、愛女をして露譯せしめたり。ルナンはアミエルを目して聖者の彿ある哲人と呼びぬ。アルプスの麓、ゼネバ湖の傍り或は嶺ゆく雲にそぞろの思ひを寄せ、或は晨夕の鐘の音に熱き祈りの涙を灑ぎて、ひたすら神と眞理とに仕へたる彼が三十年の生涯の、高貴なる思索と瞑想とは此の一卷に凝縮さる。

村岸清彦著

十字架の人ウェスレー

價壹圓九拾錢
送料金拾貳錢

新刊

クリスマスの鐘、霜夜の空に鳴り響くを聞かずや。基督の生る丶何ぞ時の一九二一年昔なるを要し、地のベツレヘムなるを俟たん。現世の日本に於ては基督は吾々各人の胸裡の馬槽に生れ給ふべき也。吾等が今、メソヂスト教祖と言はれ、十字架を負ひて地上に神の國を建設せしウェスレイを仰ぐは基督がウェスレイを假りて十八世紀の英國に生れ給ひしを知ればな也。

宮島新三郎著

近代文明の先驅者

定價金壹圓七拾錢
送料金拾貳錢

好評・再版

ホルムスヒールドは遠く人寰を絶せる仙境にして老樹の天を摩せる所、幽禽の聲に耳を傾けつ丶ある老翁あり。これ二十世紀の老豫言者と稱せらる丶カアペンタア也。彼の思想は幽玄味頗る東洋思想と酷似し、將に來るべき精神文明の先驅者を以て目さる。本書は宮島氏が多年の研究により、彼の隱者的聖生活と思想とを論述せしもの、處女の如き霑ひに充てる筆致は靈界渇仰者を醉はしめん。

發行所
東京市神田區表神保町一〇
春秋社
(振替東京二四八六一 電話神田二一三八)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN